

〔翻 訳〕

社会的世界においていかに自らを方向付けるか

リュック・ボルタンスキー, ロラン・テヴノー
中原 隆幸, 須田 文明 [共訳]

Boltanski, L., Thévenot, L. (2015) “Comment s’orienter dans le monde social”, *Sociologie*, vol. 6, no. 1, pp. 5-30

目 次

はじめに

- I 社会的分類の実践的製造
- II カテゴリーの命名と正統な称号
- III 集団と、その特徴的の代表者
- IV 社会集団のスタイル化
- V 社会的分類のための闘争
- VI 同一化と指標の計算
- VII 記号の付与と形態の承認
 - ・ゲームの初盤
 - ・ゲームの中盤
 - ・ゲームの終盤
- 1. 解釈の傾向
- 2. 国家の分類

はじめに

日常的相互行為の社会学は、アクターたちの社会的アイデンティティを標定し、こうしたアイデンティティの記号を形成する共通の性向（例えば、象徴的対立の状況、挑発、虚勢等の状況で明らかになる）をすべての諸個人の中に想定している¹⁾。しかし明らかに経験的探求の対象をなしているこうした性向は、暗黙裡にであれ、明示的にであれ、しばしば社会化過程の直接の帰結として提示され、個人的コンピテンス

の相違の問題が提起されることはない。本稿で我々が大まかな方針を提示する現在の研究は、元来は、以下のような問題を解明することを目的としていた。すなわち、個人的な精神的イメージと、（例えば職能組合によって、団体協約、医師のような職業のように規制された職業秩序、さらには国家の統計機関²⁾によって）確立された集団表象の社会的過程との間の関係はいかなるものか、である。どの程度まで、これらのイメージは共有されているのであろうか、また同定の具体的課業において、これらのイメージを形成する能力はすべての者にとって平等なのだろうか。またもしこうした能力が個人によって異なるとすれば、そのバリエーションは、確立された分類や公式的称号（例えば、仕事の名称、慣行的な分類、統計分類³⁾）についての知識の不平等な度合いだけに関連しているのだろうか。

こうした問題に答えようとするために、我々は、いくつかの実験とゲーム状況を開発した。それは、参加者に対して彼らの現実感覚を働かせるように強いる。しかし我々は、純粋な実験室の実験とは異なり、日常的な社会状況を対象とすることができるような客観化様式を探求した。すなわち社会生活において用いられている形態の使用法について、とりわけ材料の選択において、また手続の考案においてである（実験で使用された事例は、現実に存在する個人に対応していたし、手続きは、社会的ゲーム、集合的交渉のゲームのそれであった）。

情報収集はこれまで以下のように実施され

た。すなわち、毎回、実験^{エクササイズ}課業は、非常に多様な諸制度に帰属し、研究目的について当初から知らされていた15人の参加者を集めた2日間のセッションに統合されていた。ある巨大国有企業のマーケティング部、看護師学校、介護士上級職学校、多国籍食品大手企業に属する販売部代表者のグループ、大学での職業訓練学級に参加する失業者グループ、引退者クラブに所属する引退教師及び引退小学校教師、コンピューター領域に特化した工業技術短大IUTにおける大卒者職業訓練成人グループ、最後の二つは国立統計経済研究所INSEE調査員のグループ及びこの機関に属する調査のコード化担当者のグループである⁴⁾。セッションは三つの実験課業を中心に組織された。最初の実験課業は「(社会的)環境の分類を構築すること、次いで単一分類へのその統合を交渉すること」にあった。(最優先とされた⁵⁾)第二の実験課業では、参加者に対して、「管理職層」と「労働者」に特徴的な三つの例を産出するように要求した。最後に第三の実験課業では、参加者の質問に応じて、彼らに提供された指標から実在の人の職業と社会的環境を言い当てることであった。

I 社会的分類の実践的製造

実験課業参加者に提案された事例の分類による社会的分類構築という実験課業は、社会的世界を考察するために使用されるカテゴリーを探求することを目的としていた。より特殊には、この実験課業によって、実践の様式で実施されている日常的標定カテゴリーと、他方でのINSEEの社会職業カテゴリーコードのような公式的分類(センサスや行政的登録、社会学的調査といった多様な使用のために社会的世界の均質化され、標準化された表象を生み出す)との間での関係を分析することができなければならなかった。この実験によって我々は、仮説——INSEEにより収集された職業申告のコーディング作業についての以前の観察が指摘していた——を検証しなかったのである。

こうした観察の利点は、ルーティン化され、標準化された分類状況——そこではエージェントたちは、合理的基準システムの実施に広く基づいた明示的分類ルールを適用するよう指令されていた——に関わることであった。課業のこうした経済的、準テーラー的定義は、別々に使用される何らかの基準のセグメント化された使用によって、質問票の全般的情報の総合的把握(すなわち人物の全般的理解)の節約(エコノミー)を前提としている。その上、こうした実施方法はいくつかの基準のクロスに基づいた学術的分類の構築原則と合致している。経験は以下のことを示していた。つまり特に複雑な事例の多くの場合において——そこでは、提供されていたルールでは、エージェントたちは課業を完成させることができなかった——、彼らは、およそ以下のように記述できる全く別のやり方で作業していたのである。

(1) 彼らは質問票に含まれた情報の大部分を考慮していた(彼らで使用するよう指令されていた基準に集中することにとどまるのではなく)。
(2) 彼らはこうした探求を通じて、分類空間においてすでに知られ、標定されていた(目印となっている)社会的タイプへの同一視によって社会的形態を同定していた。

こうした最初の観測に基づいて、我々は分類手続きを体系的に登録することを可能とさせる実験課業を構想した。それは、その科学的利用と並んで、最もしばしば暗黙裡に社会職業的分類の製造およびコード化作業におけるその使用を支えているメカニズムに対して、参加者たちの注目を向けるという教育的利点を示している。

分類の実験課業は以下のように構想されている⁶⁾。参加者は二人のチームにまとめられ、このことは孤独の作業に対して、実施されている分類原則についての交渉と議論、さらにそれを通じた明示化の利点を示す(我々は、特定の場、この作業の間で交わされた対話全体を録音していた)。それぞれのチームは、以下の情報、すなわち年齢及び居住場所、学歴資格、教育を

受けた年数、職業、身分(自営業や職員など)、企業の従業員数、場合によっては労働者の格付け、その人が働いている企業名と住所といった情報を含む実例により構成された個人の64のカードのパックを受け取る。これらのカードは職業及び社会状況のかなり広範な標本を代表するように選択されたセンサス報告書により構成されている。我々は、容易に標定可能——というの、共通の社会的表象に適合しているから(例えば、「医者」や「教師」)——と思われるような事例と、(彼らが問題ありと想定するような)確固たらざる地位を持った事例(高等教育資格を保有した26歳の、ガレージでの油まみれの車洗浄者)を混在させるように注意した。

情報タイプとその提示は、統計的調査(センサスなど)のための質問票を想起させる。こうして情報とその提示は確かに、明示的基準の実施による分類の合理化という意味で課業の実施に影響を及ぼす。したがって、フォローされた手続きにおいて、こうした論理と対立するあらゆることがとりわけ注目に値するのである。

観察者は参加者に対して、「当該の人物が帰属する環境に応じて、これらのカードを重ねるように」という指令を与える。彼らは、好きなだけの束を作ることができ、時間は制限されていない(この課業はたいてい45分から1時間かかる)。この指令は、カテゴリーの定義について、意図的に曖昧であり、観察者たちは、参加者がそれについて要求するとしても、正確な内容を与えることを拒否する。この最初の局面を終えて、それぞれの重なりが一番上に、もっとも代表的なカードを置くという第二の指令が与えられる。つまり「パックの内容を別の者たちに対して理解させることができる」のである。最後に第三の指令として、参加者はそれぞれの堆積に名称を与えるよう要求される。

参加者が最もしばしば採用する手続きは以下のようなものである。すなわち彼らはカードを、それが置かれている任意の順序で(カードのそれぞれのパックはトランプのカードをシャッフルするように事前にシャッフルされている)、一

枚ずつ手に取り、彼らにとって妥当に思われる最初の対立軸に応じて分類空間を描くように、テーブルの上にカードを並べる。次いで参加者は、このように描かれたそれぞれの堆積にカードを追加していこうとする。最初のいくつかのカードは通常、好き嫌いの点から、またいくつかの単純な対立軸に応じて捉えられる。これらの区別は社会的世界の日常的位置づけ(「高い」、「低い」、「平均的」)を参照できるし、職業に付与される実質的ないし本質的特性(「農地」、「物質的な物の製造」、「肉体労働」、「芸術」など)にも、制度化されたカテゴリーにおいて確立した相違(「教育」、「医療」、「格付け」など)を参照することもできる。

こうして国有大企業のマーケティング部に勤務する二人の女性、一人は、学士号を持つ管理職で、同一企業の独学の管理職の娘で、他方は前期中等教育修了証書BEPCを持つ職工長で、この企業の従業員の娘であり、彼女たちは、三つの堆積を三角形に構成することでこの実験を開始した。一つの堆積は左にあり、「むしろ肉体的」(「後で、私たちは、仕事をしている学生を取り除くべきかどうかまずは考えましょう」)である。別の堆積は「右側に」、「むしろ管理職」(「学歴のある人と、別の人たち、商業者などの区別をしてみましょう」)。上述の二つの間で、テーブルの上の方に第三の堆積がある。彼女たちはこれを正當にも「二つの間」にあると名付ける(「職工長と管理職」)。分類のこの最初の状態は、見られるように、曖昧さを排除しておらず、「管理職」というタームは、二つの堆積を特徴付けるのに使用されている。この曖昧さはおそらく、この二人の女性が占めている相対的に周縁的な立場——教育集団においてと同時に、より学歴資格あり、よりブルジョワ的な社会的出自の諸個人から構成されている彼女らの労働環境において——と関連している。この居心地悪さ(「二つの間での」)の政治的及びカテゴリー的表出は彼女らの分類の最終状態において明らかになり、このことはセッションの別の参

加者たちにより構築された分類よりもいっそうはっきりと、彼女たちのうちの一人が所属する組合CGTにおいて使用されている分類原則を指摘しているのである。すなわち教育及び医療部門、労働者階級の典型的な二つの極、すなわちフリース工労働者P2と女性包装係OSを示す格付けである（これらの極の構成については後で立ち返ることにしよう）。

しかし当初、単純に思われた作業は、すぐに複雑であることがわかることになる。結局、総計せよとの指令は、（維持しきれない）整合性の要請を含んでいるからであり、それが維持できないのは、我々が、意図的に、カードのパックの中に典型的ならざる事例を入れておいたからなおさらのことなのである。それが考慮される観点に応じて異なった複数の堆積に加えられ得るようなカードが提示されるとき、困難が登場するのである。

例えば、あるチーム（国立統計経済研究所INSEEの調査員を集めたセッションの時）の場合は、そのメンバーたちは最初の作業で、以下のような堆積を構成した。すなわち「国家公務員」、「管理職」、「労働者」、「独立自営業」、「従業員」、「医療関係」である。彼女たちは、「学歴資格を持った看護婦」（カード番号64）については躊躇し、彼女は「自由業」として「独立自営業者」に位置づけられるべきか、それとも当初に「医療関係」として指定されていた堆積に入れられるべきか考えていた。類似した事例では、作業の最初でしばしば採用されたもっとも単純な解決策は、区別を行うことにあり、例えば「国家公務員」を、二つの新しいカテゴリー、すなわち「上級職公務員」と「定義された格付けのない公務員」へと分割することであった。しかしこうした整合性の要請は即座に放棄されなければならない、区別を増加させ、顕著に分類の次元を、次いで境界線上の事例の管理の問題を増加させることになる。こうして、例えば、「教授資格のある教授」（カード番号51）の事例が提示された

とき、参加者は、「この職業は異なっており、別に分けられる」として、「上級職国家公務員」と同列に置くことを決断できず、新しい全体、すなわち「教育」を生み出すように、彼女たちがすでに構成していた堆積を再編成しようとしたのである。しかし「小学校教師」（同57）というカードが登場したとき、新しい認知的コンフリクトにより彼女らは立ち止まることになった。「格付け」および「学歴資格」、「水準」の違いに注目して、彼女らはこれを「教授」と並べることを拒んだのである。

区別が困難な場合、しばしば採用される解決策は、きっちりした基準システムによって分類を構築しようとするのをあきらめ、また同時に、整合性の要請を放棄することである。それは、（カードが、その下でお互いに結合されている）関係が同一の全体の内部で変化し得るように、カードの間での近しさ（曖昧で暗黙にとどまっている）に応じて堆積を構築することなのである。

こうして、分類作業が進むに応じて、それぞれの堆積の同一性が大きく変容することがあり得るのを観察することができた。しかも、こうした変化は堆積システム——何らかの特別な関係の下で突き合わされた最初のカードの間での対立（例えば知的労働 v.s. 肉体労働、学歴資格有り v.s. 学歴資格なし）に基づいて考案されていた——の再編を必ずしももたらさなかった。結局、それぞれの堆積の漸進的形成を通じたカードの蓄積は記憶のない過程（そこでは、カードの間の類似性の原則は絶えず変化している）として現れることができる。

例えば、公共部門と民間部門との間での対立と、高い学歴資格ある者と学歴の低い者との間での対立という二つの対立に同時に基づいて突き合わされていた二つの最初のカードから、ある堆積が構築されている。提示される第3及び第4のカードは「看護師」および「社会心理療法士アシスタント」であることがわかる。これ

らは、(実行者の間での会話記録によれば)そのアイデンティティが「公共部門の平均的カテゴリ」であるような堆積に同一視される。しかしこうした同一視は、「医療関連職業」という新しい次元を導入し、これが徐々にこの堆積全体にそのアイデンティティを与えることになる。

他の例。ある堆積は「中等教育コレージュCES教授」の事例を中心に形成され、それに「教授資格のある教授」(彼らにとっては、二人とも教師なのだから近いと思われる)のカードが追加された。後に、「CNRS研究者」、次いで「国庫財務官」の追加は、公務員的アイデンティティへのこの定義の移動をもたらした。最終的な呼称、すなわち「上級職公務員」がこれを示している。同一のチームはまた「従業員上級管理職」と呼ばれる堆積も作り、これは「薬剤師」、「公共事業エンジニア」、「インテリアデザイナー」、「骨董商」を含んでいる。最初の堆積は、その途上で、「教職員団体」というそのアイデンティティを失ったので、小学校教師のカードは「中間管理職」の堆積に含まれることになる。

別のチームにおいては、「芸術家」という堆積がまず構築され、それに「写真家」(カード番号7)が追加された。数分後には、「写真家」は「職人的自営業artisans」として考えられ、実験参加者はこの堆積に複数の職人を追加する。それはあたかも彼女たちが、このカード全体に与えていた最初の定義を、自らの記憶から消失したかのようなのである。

このことが意味するのは、ア prioriに形式的なアイデンティティではなく、隣接によって連なった連想に基づいた(Bruner et al. 1966, pp. 216-230が述べるように)カテゴリ構成様式は、階級の論理にまだなじんでいない子供たちや、学校での学習を受けなかった成人に限られたことではないことである。全く逆に、すべてのことは以下のことを示しているように思われる。すなわち、そこで問われているのは、実践の論理の日常的な作用様式なのであり⁷⁾、しかしこうした作用様式は実験者がそれを明示的に

要求するときには、最も学校的に完璧な階級分類の論理への準拠さえ排除しないのである。

II カテゴリの命名と正統な称号

いったん堆積ができあがるや、名称を与えるように要求されたときに、上述の分類様式は、参加者たちが突き当たる困難の起源となる。この新しい指令は、彼らに対して、しばしば、自らの分類の全体を見直させ、それぞれの堆積の内的整合性を確認させたり、しばしばカードを移動させたりすることで堆積を改善させるように促す。同様に、採用された呼称を観察者に通知することは、しばしばある種の留保を伴う。「これは完全じゃないけど、だいたいこんなところかな」とか「それは、すべてについて当てはまる名称じゃないけど、まあしょうがないよ」等々である。

結局のところ、堆積がどの様に形成されたかを記憶することによって、堆積の名称とその内容との関係を解釈しなければならないのである。多くの場合において、おそらく大半の場合において(この点について我々はまだ統計を入手していない)、堆積に与えられた名称は学術的、行政的な呼称もしくは、公式的分類で使用されている呼称を再生産しているように思われる(例えば、「中間管理職」、「上級管理職及び自由業」、「職工長」「格付けされた労働者」)。こうした傾向は、そのメンバーが平均して高い学歴水準の集団においてとりわけ顕著である。こうした集団においては、分類や呼称の公式的システムと隔たった呼称を見いだすことは、無いか、あっても極めて希である。「プロレタリアート」とか「ブルジョワジー」、「小ブルジョワジー」といったマルクス主義的のタームと関連した集団名称もしくは「貧困者」、「名士」、「エリート」等といった倫理的価値システムに準拠して定義されたタームと関連した集団名称も皆無である。行政的ジャーゴンの婉曲的タームが、日常言語の情動的、社会的に関連したタームよりも常に選好される(例えば「農民」ではなく「耕

作者]、「知識人」ではなく「高等教育ある人」)。この現象は、社会集団の呼称の公式システムの登場とその普及と関連づけられなければならない。この呼称システムはその正統性原則を「社会科学」に見だし、元来、両大戦間期(1936年)以降、とりわけ1945年以降の社会集団の表象＝代表の公式的領域の形成、階級間の交渉の形成(団体協約、計画委員会、公権力と組合との間での準制度化された関係など)と関連している。すべてのことは、社会的エージェントが、外見上テクニカルで中立的なボキャブラリー——それによって、それ以降、日常生活の通常の流れにおいて、婉曲的に、階級闘争に言及するよう見られることなく、社会的差異について語る——を自由にし得るようになったかのようなのである。心理分析のボキャブラリーの普及(Moscovici, 1961)が、とりわけ知識人に対して資源——性的に過剰な「卑猥な」単語を使用することなく、もしくはこう言って良ければ、脱現実化したように、この言説の直接的な性的含意なしにセクシュアリティについて語ることを彼らに可能とさせる——を提供したやり方と、社会階級表象のこうしたボキャブラリー形成とを関連づけることができる。

しかしこのことはまた、以下のことを示している。すなわち実験参加者により構築された分類において、公式的な分類に対するあらゆるずれ(たとえわずかなものであれ)は妥当であり、社会的世界と、その分割についての、この分割が何であるかについての、また何であるべきかについての意図ないし、はっきりとした立場を表明しているのである。こうして例えば、「生産的労働者」と「非生産的労働者」との対立の強調は、階級システムの「マルクス主義的」表象に準拠するという意図を表明するに十分であり得る。

アミアンの見習い看護師ミシェルは、このセッションの希な男子の一人であり、我々が実施した質問全体の中で、当初から観察者に対して競争関係にあるような、これまた希な人々の

一人である。分類作業の当初から、彼は、社会階級の「科学的」定義のないことに反対した。彼によればこのことは実験課業について信用を失わせ、これから教育的利益を失わせてしまう、というのである。指示を修正することで、ゲームを再構築することができるかと彼は感じており、彼は、提案されているような実験課業は、同僚たち(多くは女性で、その「科学」を持っていない)の頭の中に混乱を持ち込むことしかできなく、「階級の決定」についての彼女らの意識化に障壁をもたらすだけであると考えた。課業のこうした定義は、彼に対して、——次いで彼に提案されることになる実験を通じて——(彼が社会的世界について、その差異について、その分割について抱きうる)実践的知識を使わないように、もしくはこれを抑制するように導くことになる。こうして、5つのカテゴリーの分類(「生産的プロレタリアート」、「非生産的プロレタリアート」、「小ブルジョワジー」、「平均的ブルジョワジー」、「高級ブルジョワジー及び直接的な代表」)を構築した後で、彼は「家具職人」と「小学校教師」をお互いに同一視するようになる。この二つの事例の間で彼が行った類似化について問われると、彼は、これらの二つの環境についての直接的知識を活用させることで、生活様式や嗜好等における、相違の存在を拒否するまでに至るのである。

規格(規範)からの逸脱は、実験参加者が自らの社会的アイデンティティとの間に有するコンフリクトに満ちた関係としばしば関連しているようにも思われる。例えば、その参加者たちが職業訓練中の失業者だったようなセッションを通じて、50歳以上の二人の元企業部長からなるチーム(一人は高い学歴資格があり、もう一人は学歴資格がない)は、「学歴資格ある部長」が「独学部長」と区別されるような分類を構成している。同一のセッションで、インテリア・エンジニアの地位に昇進したテクニシャン(グランゼコール出身の「本当の」エンジニアとの対立に引き続いて2年前に職場を追い払われ、

失業中)が、他の分類において「管理職」と「エンジニア」によって占められている空間をじっさい空白にさせているような分類を構成している。苦痛に満ちた経験を自分に思い起こさせるこれらの名称を考え、記述する必要がないように、彼は堆積を名付けるために、(教育システムと格付けの間で、彼にとってコンフリクトに満ちた関係に基づいて構築された)抽象的基準システムを使用する(すなわち「高等教育を受けた従業員」や「特別な格付け」、「特別な格付けのない者」)に対立した「極めて専門的な高等教育を受けた従業員」である)。

これもまた同一のセッションの中で、失業中の学歴資格ある二人の若者からなるチームは、「ガレージの洗車係」(カード番号11)のカードをめぐって「暫定的な不完全雇用」というカテゴリーを構築する。これはこのチームが曖昧さの極限的な事例をなしていたこと(高い学歴資格を持った23歳の男性)によってまさに導入され、同じ理由により、たいていの別の参加者たちからは「それほど代表的ではない」、「周縁的」と見なされることになった。

このチームは、二人の若い男性から構成されており、二人とも(社会的分割が依拠している)正統性原則にたいして距離を置く理由があった。最初のピエールは野外市場の商人の息子で社会福祉士を妻に持ち、電気的高等テクニシャン教育を受けた後に、インテリア・エンジニアの地位に就いている。二人目のクロードは社長の息子で、商業BTS(上級技術者免状)、DUT(工業技術短大修了証)資格を持ち、その不安定な職業生活は単発的な仕事の連続からなっていた。つまりVRP(出張商業代理人)、自動車学校の監督、航空会社の地上要員(彼は「カナダ航空の客室乗務員」であったと口頭では申告し、自らの出自環境に対するその断絶を挑発的に表明していた)である。

参加者は全体として、集団を名付けるために、かなり少数の安定したボキャブラリーを用

いるとしても(上述のように、このことは公式的統計カテゴリーの押しつけの効果である)、それでも同一の称号、もしくは近い称号が、カードの様々な全体を示すために使用され得る。例えば、社会福祉士長たちが参加したセッションの場合、多くの点で(性、年齢、所得、学歴資格など)かなり均質的な集団であり、主要なバリエーションは、社会的出自や配偶者の職業に由来する格差により導入される。12人のこの集団(二人のチームでこの実験を実施する)により産出される六つの分類において、「中間管理職及び教職・職工長」もしくは、「教職・職工長」および「中間管理職」というカテゴリー(もしくは、第5チームでは「テクニシャン」カテゴリー)が登場する。これらの称号の下に集められたカードから抜き取ったときに、どのカードも六つの全体には共通していないことがわかる。ある一つのカードは五つの全体に共通しており(「係長」(カード番号65))、四つのカードは四つの全体に共通している(「資産管財人」(同28)、「現場監督」(同40)、「国家資格看護師」(同64)、「社会心理士アシスタント」(同2))。12のカードは一つないし二つの全体にしか登場しない。称号と、それが示す全体との間での関係が、社会空間の中間的領域で、とりわけ曖昧であるように思われる。こうして同一セッションの六つのチームのすべてが「上級管理職」というカテゴリーを作った(もしくは「上級管理職と自由業」ないしは「上級管理職とエンジニア」)。三つのカードはいずれにしても六つの全体に共通しており(「公共事業エンジニア」(同45)、「弁護士」(同48)、「医師」(同22))、三つのカードが五つの全体に共通している(「科学研究」(同59)、「薬剤師」(同37)、「教授資格のある教授」(同51))。同一カードが付与され得る全体領域は、カードに現れる個人の特性がそれほど結晶化していないほど、いっそう広範に思われる。こうして、例えば「セントラルヒーティングのエンジニアコンサルタント」(同5)は、その名称が高い学歴水準(「エンジニア」)への、また自由業活動(「コンサルタント」)への言及

を含んでいるがBEPC（前期中等教育修了証書）よりも高い学歴資格を持たず、従業員なのである。こうした職業は、同じセッションの間、以下のような集団に加えられている。すなわち「自由業」（2度）、「上級管理職」、「中間管理職」、「エンジニア」、「従業員」である。

Ⅲ 集団と、その特徴的 대표者

最もしばしば正統な統計的および行政的な分類を援用する同一カテゴリー呼称（例えば「格付けされた労働者」、「中間管理職」）が、異なったチームにおいて、（お互いに重ならず、その共通部分がしばしば極めて限定された）職業の全体をカバーしているとしても、それでも参加者たちの中で、社会的世界で自らを標定することを可能とさせる際だった点への収斂が存在する。

堆積の一番上に現れるように（つまり、指令を覚えているとすれば、名称や「呼称」の仲介なしに「それぞれの堆積の意味について他の人たちに伝える」ために）カードが選択された頻度が示すのは、逆に、その社会的特徴がカードに指示されている特定の諸個人が他の人々よりもよりしばしば、社会集団を代表するために、もしくは典型的にそれを体現するためにさえ選ばれていたということである。

これらの規則性が示唆しているように、エージェントたちが社会的世界について抱く表象においては、典型的な価値を有する社会的パーソナリティに具体化される際だった地位が存在している。格付けのない、学歴資格のない、もしくは資産のない、もっとも安い給料を得ている、——あるいは、質問された人々がしばしば語るように——、「低い方の人」、「底辺の人」などといった労働者を代表することが重要となっている場合、すべてはあたかも、「包装工場の女性労働者」が「料理手伝い」や「主婦」、「夜警」などよりもより良い例を構成しているかのようである⁸⁾。たいていの社会集団についても同様の断定を行うことができる。こうして「プレス工

P2」（カード番号42）は、格付けされた労働者の典型的代表である（たとえば「パティシエ労働者」（同54）について5回、「修理組み立て工」（同63）について5回、「家具ニス塗り労働者」について4回などに対して、プレス工P2が堆積の一番上に登場するのは20回なのであった）。同様に、17回選択されている「公共工事エンジニア」（同45）は、「商業管理職」（同56）（10回選ばれている）よりも、「工業設置サービス長」（同65）（7回選ばれている）、よりも、もしくは「セントラルヒーティングエンジニア」（同5）（5回選ばれている）などよりも、管理職のよりよい例である。

カード番号 4

- ① 姓名：ヴェリエ、モーリス
- ② 年齢：29歳
- ③ 住所：クレルモンフェラン市グレゴワール
- ④ 最も高い学位：高等商業大学校HEC
- ⑤ 学校を終えた年齢：22歳
- ⑥ 職業：商業エンジニア
- ⑦ あなたは、
 - ・自由業のメンバー
 - ・農業経営者、自営業もしくは独立した労働者。職人、商人など
 - ・従業員数
 - ・従業員の場合、格付け、職階上の地位
（「商業管理職層」の手書きでの回答あり）
- ⑧ 事業所の名称と住所
（「ミシュラン社、クレルモンフェラン」という手書きでの回答あり）
- ⑨ この事業所の活動
（「タイヤ製造」の手書きでの回答あり）

図1 カードの一例

以下のような仮説を立てることができよう。すなわち社会空間におけるこうした際だった焦点は、地位と職業——長い時間を通じて、表象 = 代表の社会的労働の対象となってきた——により占められている。こうした表象 = 代表労働

は、社会的、精神的表象の秩序の中で不可分の行使されてきたのである。というのは地位とその占有者との特徴が構築、表現、図式化（あるいはGoffmanの言語では、「ドラマトウルギー的強調」）の集合的企図の対象となっているという意味においてである。しかしここで問題となっている「表象＝代表」は、集団の名前の下で自らを表明するために委任を受けた「代表者」もしくはスポークスパーソンの、動員組織の形成およびその登場によって同時に政治的ないし組合的なのである。

こうして以下のように示すことができよう。（そのカードが社会集団を具現化するように、参加者たちによって選択されたような）諸個人は、強く制度化され、組織化された職業を実践しているか（「医師」、「エンジニア」、「代表取締役社長PDG」など）、労働者の場合であれば、この諸個人は——表象＝代表の組合的労働がその集団について与える——典型的表象に適合した社会的特性を持つ。こうして「フレス工P2」——その名称は、「金属工業」に特徴的な旧来からの産業活動と、団体協約により制度化された格付け水準（P2）に準拠している——は、提示された事例全体の中で、その伝統的定義において、つまりこうした「格付けされた（男性）工業労働者」（つまりEdmond Maire (1980,

p. 171) が述べるように、組合運動を支配している)の伝統的定義において労働者のもっとも良い事例なのである。「包装会社の女性労働者」については、その呼称は、工場および、特殊性のない、威厳のない（「包装」）非生産的課業、「労働者の条件」、「女性の条件」への準拠を統一の意味単位の中に集めている。「包装会社の女性労働者」もまた、まさに「格付けられた（男性）工業労働者」と対照的に、今日の典型的な事例をなしている。「周縁的」で、女性、格付けのない労働者の特徴は、「伝統的」組合組織のために、脇に追いやられて、「包装会社の女性労働者」の中に集中している。最近の組合運動と、とりわけCFDT（そのスポークスパーソンは、そのためにCGTと自らを区別しようとする）とは、こうした周縁的女性労働者を代表しようとし——つまりまたもやそれと不可分にも、政治的組合的闘争の道具により彼女たちを擁護しようとし、また彼女らを「今日の労働者階級」の「特徴的な」事例へと構築しようとした。

逆に、堆積の一番上に登場するにはほとんど選ばれない悪い例は、しばしば、それほど代表されていないか、もしくはより少なく代表されている職業によって構成されるか（21回選択された「農業耕作者cultivateur」（カード番号33）に対して3回しか選択されない「庭師jardinier」（同5））、あるいは、構築された複数カテゴリーの境界線上にあると見なされた職業によって構成されるか（こうして、2回選択された「写真家」（同7）は、15回選択された「家具職人」（同24）と同等な資格としての「本当の」職人として見なされていないし、10回選択された「インテリアデザイナー」と同じ資格での「芸術家」としても、もしくは通常の「従業員」または「労働者」としても同一視されることなく、11回選択された「水道工事職人」（同25）のようなテクニシャンとしても、認められていない）、もしくは、個人がその下で提示されている職業名称と暗黙裡に関連づけられた特性を有さない諸個人、——またその「身分」が、こうして（Lenski (1954) の意味で）「結晶化していない

表1 堆積の一番上に登場するように、それぞれのカードが選択されたさいの頻度

番号	職業	頻度(回)
22	医師	30
36	社長	29
33	農業者	21
42	フレス工P2	20
38	包装会社女性労働者	18
45	公共事業エンジニア	17
61	中小企業経営者	17
51	有教授資格教授	16
24	家具職人	15
48	弁護士	15
57	教職員 (中略)	15
7	写真家	2
58	夜警	2

décristallisé)ように思われる——諸個人によってしばしば構成されている。それは、例えば、3回選択されている「職場整頓女性テクニシャン」(同16)の場合で、これはいかなる学歴資格ももたず、14歳で学業を修了し、非専門的な仕事をし、こうして、それが要求している「テクニシャン」の称号にもかかわらず、専門性のない労働者もしくは従業員に近い。

このように諸個人の間で、また諸集団の間で社会的世界に関する表象がばらばらであるように思われるのは、課業が「カテゴリー化」、つまり別のものに対してお互いに均質と想定され、一般的な同一名称の下に集められるケースの(純然たる境界線によりお互いに切断される)厳格な全体の形成に関わるときであり、(それほどにはその異なったセグメントへと組織化されず、もしくは構造化されないようなこともできる)認知的空間の際だった焦点の同定に、この課業に関わるときよりもそうなのである。カテゴリー化の課業は結局、厳格なカテゴリーへと社会空間全体を切断する傾向を想定している。このことは参加者に対して、空間とその分割についての均質的な表象を要請する。ところが、あらゆることは、あたかも以下のようなものである。つまり日常社会的意味は、均質的で、セグメント化され、方向付けられた(学者的分類がこれを想定している)空間——そこではすべての社会的地位が同じように容易に配分される——に準拠して方向付けられているのではなく、その際だった、表象された焦点——社会的風景において標定しやすく、同定しやすく分類しやすく、つまり考えやすい——によって、多様化された空間に準拠して方向付けられるのである(換言すれば社会空間と密接した、また承認された際だった地位への同一化によって(Bourdieu, 1980a, Centivire, 1979))。

IV 社会集団のスタイル化

カテゴリーに特有な職業——それを通じて様々な社会環境が考えられる——をめぐる組織

化は、(セッションの始めに参加者が完成する)最初の実験課業結果の暫定的分析によって確認されている。

カテゴリーに特徴的な事例を産出するように要求される、こうした実験課業は、個人に対して典型的価値を付与された特異な形態の下へと特徴をまとめるよう強いることで、社会的形態を生み出すさいの諸個人の性向を探求することになる。この実験課業から期待されたのは、この実験課業が、社会集団を考えるに役立つ精神的カテゴリー構造の研究に寄与することである。

Elenor Rosch (Rosch, 1973, 1977, Rosch et Lloyd, 1978)が示すように、「民衆的」ないし実践的分類(つまり、樹木や図柄、表などのように全体化的で図式的な表象へと客観化されておらず⁹⁾、また専門家団体によって正統化されていない)は、学者的分類のように、純然たる限定により切断された均質的なカテゴリーや「階級」からは構成されておらず、少数の基準によって定義されてもいない(例えば「成分分析」¹⁰⁾が想定しているように)。「日常言語の意味論的カテゴリー」は、当該カテゴリーのそのより良い事例を中心に、これらの仮説に応じて組織される。すなわち「明白な事例」であり、思い浮かべやすく、ハロー効果におけるように、当該カテゴリーの他のメンバーたちによって取り囲まれているケースである。ここから最初に、カテゴリーが「内部構造」を有する(それは無差別で同等な要素からは構成されてはいない)ということが導かれる。そして第二に、このカテゴリーは「決められた境界線」を持っていないことである。これらの仮説を検証するためにE. Roschにより構想された課業は、これまで、色と形のカテゴリー及び植物学と動物学のカテゴリーに関わっている。すなわちそれが示すのは、例えば、犬を思い浮かべる人にとって、別のよりもより犬らしい犬(more doggy)が存在するということである。こうしてその長い耳とそのふさふさしたしっぽを持った「レットリヴァー」が、犬の「良い例」をなす。すなわちそ

れはこのカテゴリーにおいて中心的な位置を占めているのである。逆に「ペキニーズ」は「悪い例」なのである。

参加者に対して、「管理職」について「発明され」得た三つの例と、「労働者」の三つの例とを与えるように要求することで、我々は、これら二つのカテゴリーの「特徴的な」表象＝代表の「想像上の」標本ないし「良い例」を構成する手段を手中にした¹¹⁾。次いで、我々は、BSNやPechiney、そしてとりわけIBM（小企業はしばしば広告や企業向けサービスの企業である）といった強い可視性を付与されるための標本を、これら二つのカテゴリーと比較することができた。こうして極めて強いエンブレム的な価値を保有する特徴を付与された「上級管理職」のスタイル化された表象が描かれるのが見られる（HEC高等商業大学校グランゼコール卒業生——マーケティングや広告、情報部局のメンバーで、メルセデスベンツやフォルクスワーゲンなどを所有する——が頻繁に登場し、表象の「際だった点」として機能する）。

少なくともここで分析されたケースにおいては、精神的カテゴリーの構造は、集団の形成の歴史の産物であることを示すことができる。「管理職層 cadres」のカテゴリー——1936-1940年の社会的闘争を通じて、名称と組織化を自らに与えることで明示的に構築された——のフランスにおける形成の歴史的研究が示すように、この「新しい」集団は結局、結集と包摂、排除、限定付け、定義の作業の帰結である。こうした結集はグランゼコール（とりわけEcole Centrale）出身でブルジョワジー出自などといったエンジニアにより形成された中核部分を中心とした継起的な同化によってなされた。この中核部分は、言わば、（この集団が、それをめぐって結晶化するさいの）吸引の中心極をなしていた。グランゼコール出身のエンジニアと上級の「管理職層」は久しい間、この集団の表象＝代表システムをコントロールし、つまり、その組合的、政治的代表的その審級と並んで、社会的もしくは精神的な表象のその手法をコントロールして

きたのである。「真正の」「管理職層」の表象はこうして、彼らのイメージに合わせて形成される。他方その職業的、社会的構成によって極めてヘテロなこの集団（同一の単位の中に、大ブルジョワと小ブルジョワの分派を結集させている）において、彼らが高学歴資格を持たないという事実により否定的に定義される「独学者」が、最も威厳あるグランゼコール卒業生（10-15%）よりもかなり多いのである（およそ65%）。数において支配的でありながらも政治的に、社会的に支配された小「管理職層」は、非決定的な境界線を持った曖昧なこの集団の中で中心的な位置を占める者たちによって、語の異なった意味で代表されるのである（Boltanski, 1979）。

表2 代表的な標本と統計的標本
(省略)

こうして、カテゴリーの名称を指摘されたとき、心に「自然発生的に」浮かび、何らかの方法で、目印の点として役立つ典型事例（それほど良い例でないカテゴリーに帰属しているかどうかは、焦点へのその近接性もしくは距離に応じて定義される）が、エージェント（そのカテゴリーにおいて中心的な立場を占めている）のスタイル化され、図式化された表象＝代表をなしている。つまり「管理職層」というタームに実質的内容を与えることが問題となっている場合（「基準」によってその抽象的な定義を提供するのではなく）、あたかもすべては、質問された人が自然発生的に、典型的な事例を指示するように事が運ぶのである。それはこの曖昧な全体の周縁に位置する外れた例を考えることを回避することによってである。「管理職層」の良い事例は、この集団の中で完成される表象＝代表労働から産出されたスタイル化された図式に合致している。「良い事例」の選択を考慮するために、また精神的カテゴリーの構造を正当化するために、知覚器官の生理学的特徴と関連した「自然な」特性を指摘することはここではできない（Berlin, 1969, Kay & McDaniel, 1978）。結局、

「管理職層」の場合、焦点は、事例——そこでは（このカテゴリーの社会的政治的代表的道具を独占するに至った）自然人の特徴がそのスタイル化された表現をその中に見いだしているような——により占められている。こうした「際だった」事例は、（集団の形成とその歴史の形成に伴う）コンフリクトと闘争の産物であり、こうして、それは軌跡と図式の状態で、精神構造に統合されているのである。

しかし、集団のカテゴリーを、いわゆる「自然の」カテゴリー（形、色、もしくは動植物カテゴリーでさえ）から区別しているものをわからせるためには、これらのカテゴリーが歴史の産物であることを想起させるだけでは不十分である。より根本的な特徴がこうしたカテゴリーに対して全くもってオリジナルな地位を与えている。すなわち日常の社会集団の分類手法として、これらのカテゴリーは、（カテゴリーを実現し——外在的事物を秩序づけるためにこれらを利用することで——不可分にそれ自身の相対的地位を定義することになる人々もまた帰属しているような）世界に適用される。こうしたカテゴリーはこのように確立され、中立的、もしくは受け身の受容及び使用の対象なのではない。例えば支配的な表象＝代表は、かかるものとして知られることができ（しかししながら、「本当のもの」として承認されることなしに）、複雑な戦略——その中では、承認と抵抗、同意と距離が混合されている——の対象となっている。こうしてエージェントが管理職層カテゴリーの最も公式的な表象＝代表に合致した「管理職層」の事例を与えるようにいっそう性向づけられているのは、彼らが自分自身このカテゴリーにおいて支配的な地位（グループA）を占めているからなおいっそうそうなのであり、もしくは、このカテゴリーの外側にあり、自らに提案された実験課題によっては個人的には問題外であると感じている（グループD）ほど、いっそうそうなのである。逆に、企業領域において被支配的で脆弱な地位を占めている人々（工業的企業、商業的企業の従業員、失業者から構成されるグ

ループBの場合である）は、自分たちが支配的な表象＝代表性を承認していることを示すこともできるし、中心的地位に調整された事例と小「管理職層」（周縁的地位を占めている）とを結合させることで、また第二の者（小管理職層）たちを第一の者（中心的事例）よりもより「特徴的」もしくは「代表的」として提示することで、彼らは支配的表象への抵抗を示すことが同時にできる。彼らはそれによって、根本的な政治的行為を遂行する。すなわち統計的代表性の名の下で、政治的代表性に抗議することであり、集団において、権力の地位を占める人々に対して、この集団の名において語り、行為し、彼らの人格の中にこれを具体化する権利を拒絶することである。

より正確には、回答の深い分析は、参加者により提供された事例が、「ステレオタイプ」の機械的で受け身の表明（立ち上がらせるにはちょっとした刺激で十分であるような）ではないことをわからせてくれる。「ステレオタイプ」に合致しない回答は、「ステレオタイプ」が知られていないことを意味するものではないし、いずれにしろ実験課題は、能力「テスト」——基本的社会形態を生み出す（それによって、これを承認する）さいの性向を評価することを可能とさせる——として使用されることはできない。逆に、我々が示すことができるのは、回答は毎回、立場の表明であり、これはそれぞれの参加者が、カテゴリーについて抱く表象を示し、その結果、それぞれの参加者がこのカテゴリーの支配的表象との間で維持している関係を表明しているのである。我々がこのことを特によく見るのは、三つの事例の構造を分析することによってである。それは継起的に記載され（記述の順序）、次いで課題の最後の新しい指令に引き続いて、その典型性の度合い（典型性の順序）に応じて並び替えられる。我々は、参加者たちに三つの事例を与えるように要求することで、彼らに対して、「管理職層」の支配的表象を説明するだけでなく、彼らのリストの中にそれほど典型的でない事例を登場させ、またこの

カテゴリーの内部でさえ、差異のシステムの存在を示唆し、つまりある空間を作り出すことができる可能性を与えた。

例えば、こうした可能性はDavidにより採用された。彼は失業中の商業小管理職層で、完全に異なった三つの事例を案出することで、集団に関する彼の知識を示している。これらの事例は三つとも民間企業の領域で選ばれているのだが。

(図2及び図3省略)

最初の事例は35歳の販売部長で、独学者で月額6,000フランを稼ぎ、第二の事例は40歳の鉦山大学校エンジニアで、ちょっとしたエンジニア資格を持ち月額8,000フランを稼ぐ。最後に三人目の例は30歳女性で、広告代理店部長、高等商業学校HEC出身で、月額1万2,000フランを稼ぐ。典型性は記述の順序を裏書きしている。すなわち独学者の管理職はグランゼコール出身の管理職層よりも「特徴的」として提示される。典型化の戦略は、典型性の順序が記述の順序と矛盾する場合にいっそうはっきり見られる。例えば、労働者の娘で、銀行の管理職層と結婚している社会福祉士部長の事例である(この表には含まれていないセッションに参加していた)。マルセルは、石油産業の管理職層(大学卒資格を有し、大企業に帰属し、月額2万フランを稼ぐ)を最初に記載し、第二には社会保障の女性管理職(バカロレアしか持たず、月額8,000フランを稼ぐ)、最後の事例は金属企業の管理職層で大卒資格、月額1万5,000フランを稼ぐ。

第二の事例は、彼女自身が付与されている特徴を有し、「管理職層」の支配的表象から最も離れている(公共部門に帰属し、女性で、高学歴資格のない、それほどの高くない給料)。この事例は最も高い度合いの典型性を付与されているが、他方で最初の事例は、申し分のない「管理

職層」の社会的タイプに合致しているものの、第三の地位へと後退し、脱落している。こうした戦略はこのセッションに参加した社会福祉士によりしばしば実施され、最も高額を支払われ、「商人」の極に最も近い「管理職層」よりも、公務員の管理職層(しかしながら、最初公務員管理職層は頭の中に提示されていなかった。というのも、彼らは第二に、また第三の地位に記載されていたから)をとりわけ最初の地位に再配置することを特徴としている。こうした戦略はおそらく「公平無私」の価値と関連した倫理的立場(社会福祉士は、教師や一般的に公務員全体と同様、これと関連している)を表明している。

この最後の事例において、「典型的」とは、この場合、二重の意味で捉えられている。すなわちこの単語はもはや、もしくは単に、範例的事例を示すだけでなく、典型として与えられるに値する事例を示している。またもや(Roschにより研究された色や形のように、抽象的事物、もしくは少なくとも社会的に中立的な事物について行使される)カテゴリー化の過程と、(社会的集団を対象とし、またそれにより、その社会的地位とその価値体系により人格全体をコミットさせる)カテゴリー化の過程とを区別するすべてのものが見られるのである¹²⁾。ゲシュタルトの言語を語れば、良い形については、誰もが、それが良い形であることで「利益がある」かどうか問わないし、もしくはそれが、良い形に準拠して、諸々の形の世界を組織するのが、「公正である」かどうかなどとは問わない。

V 社会的分類のための闘争

(抽象的、もしくは社会的に中立なカテゴリーを対象としたオペレーションとは異なり)社会的世界とその分割について行使される認知的オペレーションに参与する社会的利害は、実験課業(チームの各人により産出された分類から出発して、共通した分類を交渉する)を通じ

てとりわけはっきりと表明されている。

この実験課業は以下のように提示される。すなわち各チームはペーパーボード上に、チームが分類作業を通じて確立した分類を記載する。それは、様々な堆積について、それぞれの堆積の最も代表的と判断される職業（観察者によって記載された称号ではなく、しかし実験の最中に使用されていない称号ではなく）を指摘することによってである。結局、最初の試みの後に我々が指摘したのは、社会集団の呼称に基づいた交渉手続きは、社会環境の通常のカテゴリー化様式の表現に障害をもたらすということである。堆積の名付けの局面（分類課業はそれで終了する）で見てきたように、名称への愛着はカテゴリーの形式的表象をもたらす。名称についての議論は、（それに不可避的に伴う正しい定義に関する形式主義的展開によって）それぞれのカードにより示される個別的事例についての議論を回避させることができる。このカードはよりリスクがある。というのも、それは参加者各人に対して、特異化された判断へと身を投じさせ、また日常的なライバルの人格化された表現を見いだすように強いるからである。

同様に、職業的代表者たちの間での議論の交換——新しい職業分類の確立がこうした代表を生み出し、多くの点で、ここで記述された実験課業は「実験室での」その再生産をなしている——は、真の名称の定義と選択の良い基準の設定の法律的、もしくは準法律的形態をとる。こうして、このような議論の交換は、（我々がこの実験課業の中で明らかにしたように、カテゴリーのじっさいの限定から登場する）困難を曖昧さの中に置いたままにさせるのである。それは特定の職業の規定に関する法律の最近の条項の中で、認可条件、すなわちカテゴリー名称とその定義、これを構成している人口との間での関係が規制されていることに見られるとおりである。

これらの理由のために、チーム（そこでは、様々な項目の代表として選ばれた事例が主として考慮されている）によって構築された多様な

分類の要約手続きが精査される。その特徴的な事例のリストにより代表される最も短い分類から始めて我々は、より詳細な分類との比較に着手した。それは、ある事例を別の事例と同一視することによってであったり、追加事例タイプの形で、新しい項目を追加することによってであったりした。指令は共通の分類に至ること、単一的分類に至ることであり、このことは参加者全体の合意を得る（チームの各人が、自らが構築した分類に導入しようとした最大限の情報に固執しようとする）。この場合またもや指令は矛盾している。というのも、共通の分類は、チームの各人により実現された分類の中に含まれる区別のすべてをはっきりと維持したままにしておくことなどはできないからである。すなわち集団が社会的に均質的ではないほど、「交渉」はいっそう激しい形態をとるコンフリクトに至る。結局、参加者は自らが帰属しているかもしくは自分たちがそこに近いと感じる社会的空間のゾーンにおいて些細な区別を増加させようとする傾向をきわめて一般的に持つか、あるいは逆に、自らと縁遠い社会空間のゾーンにおいては、参加者たちは、ある事例と別の事例の結合や同一視を提案する傾向にある。

以下のようなセッションの例がある。すなわち INSEE の調査員を集めたセッションでは、ほとんどが女性集団で、社会的にヘテロな集団であり、社会的に高い出自で、高学歴で、その夫もブルジョワの職業を行っている女性たちがいる一方、あまり学歴がなく、その出自も、夫の職業も中間階級よりも低く、民衆階級に属しているのである。

提示された職業のそれぞれの事例ほとんどが、コンフリクトを生み出し、これは、ブルジョワ的な出自もしくは帰属の参加者と、民衆的もしくは中間的な参加者とを対立させており、婉曲的に、また暗黙裡に階級コンフリクトなのである。例えば、「主婦」(カード番号60)について、一人の参加者ルネ、高学歴で、大規模農業経営者の娘で、精神科医と結婚している彼女は、こ

れを「包装工場女性労働者」(同38)に同一化しようとする。分類課業の最中に、ルネはすでに民衆的地位全体を無差別に考える傾向を示しており、かなりかさばる堆積を構成していた(20のカード、その中には「農業労働者」、「掃除婦」、「販売員」、「パティシエ」、「木こり」、「国鉄職員」、「会社員」などがある)。彼女はこの堆積を即座に「誰でもいい、そこらにいる人」と言った。また彼女は課業の終わりには、これを、婉曲的な名称によって「従業員、格付けのない労働者」と指示している。マルチヌ(前期中等教育修了証書BEPC、会社員の娘、夫は印刷所のオフセットコンダクター)は、「私は同意しないわ。掃除婦と工場労働者と、それは同じ環境ではない。同じ生活様式ではない」と語っている。

ルネ：「ええ、でも結局のところそんなことは重要なことじゃないわ」。

マルチヌ：「私はよくわからないけど…、あなたの言うことをわかろうと思うんだけど…。どっちにしたって、二つの異なったジャンルだわ。女性工場労働者は汚れるわ、彼女は、家庭で雇われている掃除婦よりもたくさん働くわ」

ルネ：「家庭での女性雇い人は失業しないわ。私は、これは同じだと思うわ」

マルチヌ：「私は、まったく同じ生活だと思わないわ。工場労働と、掃除婦、家政婦の仕事は、同じ生活ではない。私たちはこれを家政婦と掃除婦として置いたのよ」

ルネ：「彼女らが共通しているところは、どちらにも学歴資格が必要ないこと、このことがどっちにしても重要な要素だわ」

我々は、この種の議論を蓄積することができる。そこでは参加者たちは、しばしば終わることのない意見交換の中で外見上「技術的な」点について対立している(例えば二つの学歴資格の相対的な価値)。常に暗黙のその争点は、社会的世界についての表象と、集団及び階級へのその分割についての表象以外ではない。これらの

論争において、参加者たちはしばしば、自分たちがあたかも、ある社会集団の代表もしくはスポークパーソン——政治的もしくは組合的な交渉において、自らのアイデンティティとその利害を擁護することを担っている——でもあるかのように介入するのである。別の機会には、彼らの話題は別の言説を喚起させ、つまり社会的世界の権威ある専門家の言説、「社会学者」のそれ、しかもこのことは、分類における特定の職業の地位ではなく、集団や社会環境の定義、つまり彼らが遂行しつつある実験課業の意味そのものを、闘争が争点としている場合に特にそうなのである。こうして対立的地位のシステム——参加者たちはその出自に、またその階級帰属に負っている性向やハビトゥス¹³⁾の特徴に応じてこのシステムに介入するのである——が形成されるのが見られる。

例えばINSEEの調査員を集めたセッションの時のドゥニーズの事例があり、彼女はかなり衰退しつつある社会的軌跡を経験してきた(海軍士官で、引退後「絵描き」となった人の娘で、彼女自身はタイピストの資格を持ち、独学者の商業管理職と結婚している)。彼女は、一方での「職業」もしくは「状態」と、他方での「環境」との間での対立、もしそう言って良ければ、社会職業的構造において規定された地位の占有により定義される「階級」と、(彼は「高い階級」を有している、と誰それについて言われる場合の「階級」であり、これは名前が格付けの主たる称号であるような親族関係のそれであるような別の空間に準拠して定義された)「階級」との間での対立に基づいて、その言説を構築している。こうした定義は端的に言って、格付け原則に国家の介入があまりないことによって特徴付けられた、社会的差異の表象のより古い状態への愛着を示している。

こうした区別は、格付けされた特徴の標準化と匿名化の様々な度合いに対応し、それは、称号基準(それへのアクセスが、規定されているような職業における状態もしくは機能をなし

ている)から、立ち居振る舞いや嗜好といったパーソナルな特徴(没落した財産のない貴族末裔の家族はこうして、その人が自らの出自に負う、高貴な称号に客観化された特質と、彼らがそこから生き残りを引き出した「生計手段」に値しない特質とを区別できた)に至る。しかしドゥニーズは、「階級」の永続性を説明するためのその努力において、ルネ(その出自において、またその婚姻においてブルジョワである)の懐疑主義と衝突した。ルネはそれによって、「職業」と「環境」とを区別しようとせず、ドゥニーズを「やり込める」ための資源として統計に準拠しようとするのである。

ドゥニーズ:「状況の観点では、看護師と医者をお互にくりにすることはできないように思われるけど、社会的観点では看護師は医者と同じ高級な環境にいることができるわ。だから何だって言うの。あなたは、終わることのない長ったらしい名前を持った偉大な家族を見ているとするわ。そして彼らは銀行の従業員なの。でももしあなたが望むなら、彼らは、自分たちのテーブルに銀行の部長を受け入れることさえない。というの、おわかりのように教育というものがあるからです。これこそが環境です」

ルネ:「あなたは医者よりも良い教育を受けた看護師を見いだすこともできるわ。(中略)。しかし結局(観察者に声をかけて)、あなた方のカテゴリーは、それは標本を作るためなの。あなた方は、極めて質素な環境にいる看護師を持っています。(ドゥニーズについて語りながら)彼女はすべて逆さまに捉えます。あなたは医者よりも良い教育を受けた看護師を見いだすことができます。もちろん、それも有り得るでしょう。しかしもしあなたが医師の二つの環境と看護師の二つの環境を取り上げるならば…」

ドゥニーズ:「しかしこの環境を理解することはできないわ。どんな社会環境のなかで分

類しなければならぬのかしら。私たちは(彼女は調査員として語りたがっている)、アパートに入ったときに、人との接触をもったときに、環境がわかるのよ。でも教育を状態と同一視してはならない、この二つのものは全く異なっている。社会環境、それって何なの。社会環境、それは教育だわ(中略)。ああ、あなたは、ある人を見たとき、わかるでしょう、すぐにわかるわよね。彼が扉を開けて、私たちがどの様に迎え入れるか。それが何かを与えてくれるわ。彼が自分をどんな風に表明することか…」

ルネ:「彼があなたの手に接吻するかもね」(笑い)

この議論の時には、民衆階級出身で、学歴資格がなく、国鉄の検査官と結婚しているジョシアンが、ルネの立場を支援することになった。しかしルネは、彼女に提案された力添えを拒絶した。それはまさに、この力添えが彼女にとって、社会的に劣位にあると彼女が判断する女性によって提案されたからである。そして、戦略と議論を変え、部分的にドゥニーズの提案に同調するようにその同盟システムを修正した。

ジョシアン:「ちょっと言わせて、私は、状況がその人をよく反映していると思うわ」

ドゥニーズ:「全然」

ルネ:「それはまったく教育を反映していないわ。部屋に300万フランあるアパートメントがあるけど、それは悪い趣味であるかもしれないし、それは、その人が稼ぐお金に依存しているんだわ。アパートといってもひどい趣味でも有り得るわ」

ジョシアン:「(声の調子が、不満を示している)私は教育について言っているんじゃないわ」

実験が進んでくるに応じて、また食事の終わりの議論におけるように、緊張が論争と口論の機会を増大させるようになるにしたがって、参加者たちは自らの個人的状況との接近の危険から自らを守り、自らの発話が、対人攻撃とし

て、もしくは秘められた言葉の暗示として他者により解釈されるというリスクに対して、自らを守らなければならない。こうした緊張を緩和させるためには、彼らは、一般的秩序へと逃れなければならない。このことが彼らを、社会的世界の表象の入手可能な形態を使用するように促し、主要な社会的哲学（その間で、彼らは、自らのハビトゥスの性向にしたがって配置されている）を再発明するように促す。

一例だけをとるならば、商業の代表者たち（巨大多国籍企業に属する）を集めたセッションの時点で、一方で、ピエールとマルク（その議論は暗黙の内に、端的に言って、「社会的再生産」が存在し、その結果「社会階級」が存在するという考え方に基づいている）と、他方でのロベールとジェラルド（彼らは「社会的厳格さ」を否定し、社会的秩序の「流動的」、「業績主義的」表象を擁護し、このことは、おそらく彼ら自身の社会的軌跡——労働者の息子として、彼らは「管理職層」という称号への彼らの最近のアクセスの中に強い「昇進」を見ている——と関連し、またこれもおそらく、彼らが自らの将来について抱く表象とも関連している——彼らは、ピエールとマルクよりも若く、それぞれが自らの昇進についてより高い客観的機会を有している——）との間の対立がある。

ピエール：「学歴資格と職業ということは両親の所得ということであり、したがって特定の富裕さと特定の階級とは結合している。もし道路清掃者の父と掃除婦の母とを仮定すれば、ある社会環境が存在するだろう。」

ロベール：「ピエール君、それは何も言っていないに等しい。両親は極めて労働者的であり得ても、子供は大学環境にあることもあり得る。」

ピエール：「同意しますよ。しかし、最初に、父が膨大な家族的収入を持っていれば、これは教育にも、生活費にも、消費習慣にも影響を与える」

ロベール：「私が思うに、それはいっそう妥当だ。少し以前には妥当であっただろう。しかし結局、今や、我々は、ちょっとした直線的なシステムにいることになるね。」

ジェラルドがより後になって議論に介入し、異なった学歴水準を持った人々が、「互いに出会うこと」があり得るという考えを擁護した。「彼らは共感するかもしれないし、もしくは共感しないかもしれない。それは登場する人の問題であり、しかし彼らが出会うことを妨げるものは何もない。」

ピエール：「我々は全員、このテーブルにいる以上、我々の文化もしくは我々の政治的な感覚、もしくは他のものについて、家族的な遺産を持っている。我々は、我々が、我々の出自からこうした既得権の大きな部分を引き出していることは否定できない。だから、人が教育水準へのアクセスを持っているとしても、彼はその幼年期において、特定の芸術や特定の音楽にとってはあまり好都合ではなかった環境に浸っていたかかもしれない。」

次いで議論は「商業管理職層」に関して、「独学者」と「学歴資格ある人」とのそれぞれの昇進の機会に関することになる。

マーク：「一方の独学者は、およそのところ一つの状態でとどまるが、他方の学歴資格ある者はそこから始まるんだよ。学歴資格ある者は、（販売員つまり独学者の家産の中には必ずしもないような）知識と立ち居振る舞いを同時に形成することができる。」

パーソナルな話題を規制するために分類作業を使用する試みと、一般性への回避との間で、交渉は不安定に中断する。こうして、コンフリクトが厳しさを増加させるとき、また状況が緊張するとき、集団の中に（専門家の会合におけるように）「方法論論者」——集団の中で権威を得るために集団的混乱の機会から利益を得る——が登場するのがしばしばである。他の参加者たちは、その沈黙によってでしかないと

も、彼に、この見事な役割を認めるのに貢献する。というのも、彼が一般化の集合作用の論理を極端に押し進めることでやっかいな緊張を緩和させるからである。それは、彼がカテゴリー化の操作（常に特異な事例の迷路の中に迷い込むリスクがある）を、分類方法に関する認識論的操作及び、「合理的に進む」ことを可能とさせる手続き（極めて一般的に、分類の「基準」の定義と分類論理に関連している）へと代替させるのである。

こうして、商業の代表者たちを集めたセッションを通じて、マークの、次いで少し後にジェラルルの介入（彼らは二人とも高等教育を開始していたか、完了しており、このことが集団において手法の言説について主導権を得るために必要な権威を彼らに与えた）を理解しなければならない。

マーク：「我々は何を探求しようとしているのか。我々は相違を数え上げ、パラメーターを列挙している。我々は必ずしも目標を持たない。我々は何を描写しようとしているのか。」
 ジェラルル：「（あれこれのカテゴリーにアプリアオリに人々を入れるように導いた）各人の判断基準をどこかにリストアップすることができるだろう。我々は、あれこれの理由のために、あれこれのカテゴリーの中に弁護士を置いた。何が収斂点で、何が分岐点なのであろうか。」

しかしながら、これらのアマチュア社会学者のポジショニングは社会的世界の学者的もしくは政治的代表的専門家（社会学者や組合活動家、政治家など）のそれほどの厳格さを有していない。プロの人たちとは異なり、彼らは、一般性の中に自らを係留するのに十分に強固な言語を有してはおらず、彼らの言説は常に、特異なる意見に墮するリスクがある。

結局のところ、制度化されたポジション領域に固定されていないので彼らは、永続的ポジショニングを維持するように強いられるはいな

い。ポジショニングと、それが可能とさせる同盟とは、こうして、それほど客観化されていない、集団の構造そのものに関連した変数（「親近感」と「反発」、「同盟」と「対立」）に応じて変化し、特徴や実験を通じた変化に応じて、また刺激的なもしくは退屈な、緩和された、もしくは緊張したといった状況に応じて、おそらくその変数の効果が行使される。

VI 同一化と指標の計算

それ以前の実験課業よりもいっそう、最後の実験課業は、「社会のゲーム」（「社会」についてのそれ）として提示される。というのも参加者たちは、彼らに隠された情報を推察するために競争しているからであり、また、実験課業が一人、もしくは複数の勝者を含むからである。それぞれの「勝負」は、順番に意見を聞かれ、その中で、参加者各人は自分がとった行動を説明する（こうした流れはその都度、録音されている）。「ゲームを演じる」ために参加者は自らの「社会感覚」もしくは「社会構造についての感覚」を動員しなければならない。すなわち、社会的世界の、その差異の、その分割の、その集団の、その階級の、「エンブレム」、社会的マーカー、目印、分類指標——社会生活の通常の運営において暗黙裡に使用されている——についての暗黙知である。

ゲームは結局、参加者に知らされていないが実在しているある人物についての情報を十分に集めて、その人が帰属する社会環境を、より正確には、その職業を言い当てることにある。この人物について得ることができる情報は、この人物たちが、40の質問を含む質問表に与えた回答により構成されている。参加者の各人は、（そこには彼がその答えを持っていないこれらの質問が記載されている）カードのゲームを手中にしている。ゲームの進行係のみが、隠された人物により申告された回答を同一の形で持っている。したがって各参加者はゲーム進行係を仲介としてしか、自分にとって必要な情報を得

ることができない。このため、各人は情報を買わなければならない。結局、それぞれの質問が価格をつけられ(カードに記載されている)、それは1フランから40フランであり、各参加者は、総額100フランまで支出できる。回答は、ゲーム進行係により、他者に知らせずに、それぞれのプレイヤーに個人的に販売される。進行係はそれぞれのプレイヤーの帳簿をつけている。あるプレイヤーが、自分はわかったと思ったとき、彼は回答を紙の上書き、それを封筒に入れ、この封筒を進行係に渡し、進行係はこのプレイヤーの帳簿を閉じる。紙の上には、(当該グループが同意した)分類の中で標定された社会環境もしくはより正確な職業が記載される。勝者は、できるだけ少ない金額を支出して正確な職業を言い当てた人である。質問票は六つの「テーマ」に関わる。(1) 身分(性、年齢、婚姻関係など)、(2) 職業生活、(3) 関係領域(親友、両親、配偶者)、(4) 生活水準と資産、(5) 文化的実践、(6) 倫理的性向と政治的意見

これらのそれぞれのグループの内部で、質問がこの個人の制度的特性についての一般の性格の回答を求めるのかそれとも、それらが、制度的コード化作業の対象となっていないような指標を求めるのかに応じて、質問は顕著に異なる。こうして、学歴資格のような法的にコントロールされた資質に対して、私的なもしくは自由な特性(それが人の公式的識別に属さないような事実——「嗜好や色」のように、各人は、それについて「議論しない」ことを知っている——によってまさに定義された)を対立させることができる。前者は、統計的な登録(行政的コード化により定義された、もしくは法律により規定された)に適している。したがって実験課業におけるその動員——その形態は統計的質問のそれに近い——は、参加者にとって当然のように思われる。第二の質問は人に密着したものとしてみとらえられる。人格が私的で、特異で、ないし身体的であるという意味で、逆に、彼らにはそれが標準的な質問の対象とはなり得なかったかのように、こうした背景に移動された

ように思われるのである。質問はかなり閉じられており、回答はかなり冗長である。例えば、閉じた質問により、その人が職業的組合のメンバーであるかどうか(はい・いいえ)、もしくはこの人が帰属している組合のリストについて質問することもできる。最初の場合、情報は定式の中に完全に統合され、したがって、採用されているカテゴリー化様式に依存する。第二の場合、事前のコード化の対象となっていない情報は、この人に関して、(均質的で、予めのカテゴリー・システムに還元可能ではない)回答を発する。例えば、「あなたはこの前の夏のヴァカンスをどのように過ごしましたか」という質問——「ホテルで」という項目を含む——に対して、(ゲーム参加者がその社会的アイデンティティを発見しなければならない)隠された人物の一人は、以下のような回答——この質問を買った参加者に提示されたカードについて転記された——を提供している。すなわち「パリの自宅と日中はホテル(プールつき)で」、というものであった。こうした回答は参加者たちの注目を、提起された質問の方向ではなかったような方向へと向かわせた。このフレーズは陰謀的であるという事実だけによって、それは際だった焦点——参加者に求められる解釈作業は、これに釘付けされることになる——の一つを構成している¹⁴⁾。

職業にもっとも関連した国家の変数(例えば、学歴資格、所得、企業の性格、ヒエラルキー上の地位)にかなり高く値段を付けることによって、我々は価格制約を課した。この価格制約は、私的な特徴(例えば読んだ本、好きなレコード、ヴァカンスの場所、趣味)を使用することで、どの程度まで参加者が隠された人物の職業を発見することができるかを見るためのハンディをなしていた。

作用している性向を理解させてくれるのには、とりわけ節約的ゲームの事例が役立つであろう。ジャンはまず、自分が隠されたアイデンティティを発見すべきその人物の性別について

質問した(1フラン)。こうして彼はその人が女性であることがわかった。次いで彼は年齢の問題を提起した(1フラン)。50歳で、既婚であること(1フラン)。ゲーム進行係により彼に提示されたあらかじめコード化されたカード上に、「独身」という記述に「内縁」という表示が手書きで追加されている。彼は次いで、この女性が持ち屋か賃貸住宅かについて質問する(1フラン)。答えは「賃貸」である(彼のコメントとして、賃借?しかも彼女は50歳か?)。ジャンはこのとき住居の場所について購入した(3フラン)。回答は「パリ7区」(コメントとして、「これは面白い」。ジャンはこの界隈を熟知しており、この界隈に友人を持っており、一時期、女性向けの美容師を行っていた。彼は、それが「ブルジョワ」と富裕層の界隈であることを知っており、そこにある「デラックス」な商店などを知っている)。次の質問は、好きなテレビ番組3つに関するものであった(3フラン)。「第一に、連続ドラマ、映画評論」(コメントとして、「この人はアパート管理人だな。内縁で、賃貸住宅、このような放送を見て、7区に住んでいる。管理人だよ)。ジャンは、最後に車の質問を提起する(3フラン)。「アルファ・ロメオ、スプリント、1979年」。ジャンは実験を中断し、解答を作成し、これをゲーム進行係に渡す。「アパート管理人ではなく、大きな商業者です。こんなテレビの趣味を持っているのだから。理容師もしくは肉屋、そう連続ドラマ、映画評論、アルファ・ロメオ・7区」。

ジャンは、彼がその社会的アイデンティティを発見しなければならなかったこの人物の正確な職業を当てることはできなかった。この人は店を一つ構える自営のアクセサリ商である。しかし彼は、資金の節約により、正解に近づいた。こうした節約により、そのパフォーマンスは、うまいゲーム戦略と見なされ得るようなものとなっている。以下のようなタームにおいて図式的に彼のゲームの質を記述できる。

(1) 彼はより低コストでゲームを演じている。すなわち(その支出額総計は13フランである)、彼は私的特徴のみに愛着を持つ(立ち居振る舞い、消費など)。従ってそれほど費用がかからず、同定されるべき人物のより一般的特徴に関連した記号が問題となっているかのように、彼はこうした特徴を使用する。すなわち、こうして彼は学歴資格を買わず(40フランする)、好きなテレビ番組についての情報(3フラン)——学歴資格の代替物としてきわめてはっきりとしている——を使用する。こうした記号は、学歴資格のような資質を推論するには十分ではあり得ない。これらの記号は学歴資格とは完全な関係はないが、別の指標と関連づけて、別のタイプの特徴へと間接的に関連させることで、これらの記号は社会環境において、隠された人物像を位置づけるための目印=焦点を供給する。

ここで提示された例では、プレーヤーは主として、「文化資本」と「経済資本」の指標とを二度にわたりクロスさせることで方向性を決める。彼はまず、界隈(経済的富の記号)と、テレビに関する嗜好(彼にとっては、文化的貧困の指標)。この最初のクロスは彼に、隠された人物が「管理人」である(すなわち、豊かな界隈の貧しい人、「ブルジョワ」界隈の「民衆」の人)ことを示唆した。というのも、彼は彼女が50歳で「なお」賃借人であり、彼女が「内縁」であることを申告しているということを使用しているからであり、多くの指標が民衆階級への帰属を示しており、このことが彼の頭の中で、彼女が見るテレビ番組の選択により表明される彼女の文化的嗜好と釣り合っているのである。またこの番組選択はこの界隈の「本当の」ブルジョワにとっては、理解しがたかったであろう。経済資本の指標と文化資本の指標との間の第二のクロスがある。すなわち彼が、未知の人の自動車がアルファ・ロメオであると知ったときである。このことは彼にとって富の否定しがたい記号であり、彼はもはやこの女性を民衆階級にあるとは考えることができない。この場合彼は無意識のうちにあるカテゴリーの方向に向かっている

(商人、小規模会社社長など)。これらのカテゴリーについての統計的情報(こうした情報について、彼は、はっきりとはアクセスを持っておらず、その存在さえ知らない)は、我々に、このカテゴリーがまさに、「経済資産」と「文化資産」との間での、学歴資格と所得水準との間での脱結晶化=ずれにより特徴づけられていることを教えてくれている。

(2) 彼は蓄積的にゲームしている。すなわち新たな情報は、彼を、自分がこの人物について以前に構築してきた知識を放棄させるようなことはしない。例えば、自動車のマークがわかった時、その驚きは、(界限と年齢、婚姻関係、文化的嗜好について彼が知っていることを忘却することで)彼をゼロから再出発させるようなことはしない。

(3) 彼は保証なしにゲームする。すなわち、彼はたった一つの指標により、性向全体(その統計的分析は我々に、こうした性向が強くお互いに相関関係があることを教えてくれる)にアクセスするのである。こうして、例えば、好きなテレビ番組を質問したことで、彼は未知の人が毎年読んでいる本の冊数、彼女が読んだ最近の本のタイトル、もしくは好きなレコードを質問したりはしない。そうすればその出費をかなり増加させてしまったことであろう。

(4) 彼はごりごりに、厳格にゲームをしておらず、ゲームの途中で得られた情報に応じて隠された人物の表象を修正することができる(管理人から商人への移行)。

(5) 彼はゲームの終了の仕方をわきまえている。隠された人物について彼が形成した表象を再確認するためには、彼は情報と出費を増加させない。換言すれば、彼は最低費用で、十分な度合いの確実性を得る。

(6) 彼は、社会的世界について有する実践的知識を動員することができ、こうした知識はそれ以前の彼の社会的経験と関連しており、その隠された人物について彼が収集した断片的情報の解読の手法として、この知識を使うのに十分な説明度合いでこの知識をもたらすことができ

る。

ゲームの最初の局面でよくあることなのだが、指標がばらばらな形で捉えられるとき、たいていの場合、指標は不確実で、妥当性がなく、成功の妥当なチャンスをもたらす予測を基礎づけるには不適切なものとして考えられる。こうして、例えば自動車のマークやモデルも同様である。実験の最初では、参加者たちが、自らの選択を行うために、(彼らが提起できる質問が記載されている)カードを読みこむとき、しばしば考慮がなされる。すなわち「自動車だって?それは何も意味してないよな」(すなわちどんな人でもどんな自動車でも持っている。もしくは統計的規則性の言語において、マークやモデルに応じた自動車の分散は、社会職業構造における所有者の分散から統計的に独立している)。

なおしばしば彼らのコメントは以下の通りである。「現在では、このことはもはや何も意味していない」。不確実性のこうした確認は、区別立ての記号の領有のための集団間での、また諸階級間での、闘争の実践的経験を示している(Bourdieu, 1979)。ヴァカンスについてしばしば言われている別の考察がある。すなわち「冬のヴァカンス、それはもはや何も意味していない。誰でもがヴァカンスに行くが、しかしどの様に、どこでか、を知らなければならないだろう」。もしくは、その好きなスポーツがヨットセーリングであるような隠された人物について、「ヨットは、誰でもそれを行うことができるけど、それは、小さなヨットなのか、大きなヨットなのか、川面なのかクルージングなのか、場合による」。

ゲームを演じることで、参加者たちは、指標を別々に切断してではなく(彼らが一連の質問を最初に読んだときの場合のように)、指標を頭の中でお互いに突き合わせさせることで(例えば、「賃借人」しかし「50歳」)、指標からの収益を増大させることをうまく学ぶ(個人に応じて極めて異なった度合いで、また、研究の現状では、これらの相違を社会的特徴と関連づけるこ

とはできないのだが)。それはあたかも彼らが、条件付き確率システムの形で、社会的世界についての彼らの暗黙知を動員するに至るかのようである¹⁵⁾。

VII 記号の付与と形態の承認

プレーヤーたちの間での差異を理解するためには、(彼らがそれによって回答を作成するに至るような) 認知過程のモデルを打ち立てることができなければならない。研究の現状では、大まかな仮説は以下のようである。

・ゲームの初盤

ゲームの始まり時点では、プレーヤーたちは隠された人物の社会的アイデンティティについてまったく知らない。この人物は同じ確率でもって、どんな環境にも帰属し得る。もし質問が価格を与えられていなかったならば、プレーヤーたちは無意識のうちに、まず、はっきりした制度的な関係を持つ情報(そこへのアクセスが学歴資格に依存するような職業における学歴資格についての場合のように)、もしくは職業とほとんど実質的な関係を持つ情報(例えば、「事業所の名称と社会的地位」もしくは「就いた最初の職業」に関わる質問の場合のように)を買おうとするであろう。

様々な質問への異なった価格の付与はまさに、すでに見てきたように、プレーヤーに対して別の性格の指標を用いるようにインセンティブづける。したがってまずは、たいいていの場合、最初の選択は、最も高価な質問への彼らの選好を、最も安価な質問へと振り替えるプレーヤーの受容(それ自体、こうした指標への彼らの注目に依存するのだが)に依存する。

・ゲームの中盤

特定数の指標は、プレーヤーが情報(それが何であれ)を得たとき以降、その作業の続きは分析的及び帰納的過程に還元されないことを考えさせてくれる(探偵小説¹⁶⁾において完璧な探

偵が、情報の費用と便益との間の関係を合理的に考慮するかのように)。少なくとも大多数の事例において、情報の最初の要素は、プレーヤーに対して、暗黙裡に、またほとんど無意識のうちに、(しかし、しばしば、プレーヤーたちがどのようにやったかを説明するときに、彼らはそれに言及するのだが)、自分たちがすでによく知っている人物の社会的形態、またおそらくしばしば、そうした人物の実質的、準物理的形態を喚起させるようである。またこうした形態は最小限の指標により喚起されることができ、現実には、またより正確には否定的に確立されているようにも思われる。

この場合、作業の流れは、(そのプレグナンツ(訴求力)の度合いがゲームの成功もしくは失敗に重要な影響を与える) 形態を確認することを主たる役目としている。結局、その形態が目立ちすぎるとき、プレーヤーはそこから脱却できず、彼が獲得する新しい情報がもはや使われないか、それ以前の仮説に応じて再解釈されるかのようなのである。この場合プレーヤーは、隠された人物について自分が抱いている観念を修正することができない。

・ゲームの終盤

しかしながら隠された人物の際だった社会的な形態及び正確な表象の構成(参加者たちは、しばしばその物理的記述——しばしば正確すぎる——を与えるまでに至る)は、必ずしもプレーヤーたちに対して、その検討を放棄させ、ゲームを辞めるよう促さず、彼らの回答を与えることを促すわけではない。しばしば彼らは、情報を買いつけるが(このことは、原則的に、「良い回答」を見いだす彼らの機会を増加させるが、競争において勝利する機会を減じさせる)、その選択を確認するためにしかこの情報を利用しない。

この最終局面は安定化過程に似ている。この過程を通じて確認されなければならないのは表象そのものというよりも、むしろ(ゲーム進行

係に伝えようとしている) 隠された人物の表象の確たる根拠へのプレーヤーの信念なのである。

こうした形態の正しさを確保するためにのみならず、(それに関与し、その人物について支払うリスクがある) 個人的解釈が引き起こす不確実性を緩和させることで自ら安心するために、プレーヤーは、国家の変数(学歴資格、所得など)に基づいた妥当な説明によって、こうした解釈を補強させようとする。その料金付けシステムによって、ゲームはこうした不安に不利益をもたらし、したがって(この説明形態——嗜好による解釈の放棄を代償にして法律もしくは統計的規則が可能とする——につけられる) 価格を考慮することを可能とさせる。

一つの例が、「際だった社会的形態」が意味することをよりよく理解させてくれよう。隠された人物の一人(アクセサリー商)に関する情報は極めて慎重に性に関する指標を含んでいた。質問票には明らかに予想されておらず、こうした性に関する妥当な指標は、負担増の形で、提示される(二つの質問で示される)。「婚姻状態」に関する質問に対して、「独身」の欄がチェックされ、手書きで記載された追加を伴った。すなわち「内縁関係」である。第二の負担増は、最近のヴァカンスに関する質問への回答が指摘されていたカードに現れている。すなわち「パリの私の家で、また日中はプール付きのホテルで」である。他方で副次的指標は一方では「軽薄さ」として定義される「女性性」と関連づけられる。例えば「女性アクセサリー商」は、日刊紙を一つも読まず、一冊の週刊誌のみ *Jours de France*——「女性的」イメージ(モードなど)を持ち、しばしばプレーヤーたちにより「美容院での待ち時間」に関連づけられている——を読む。これらの指標が説明するのは、隠された人物は、最初の質問時点で、女性として(性について質問されていないとしても)、また「若い女性」(「女性的」職業を行い、しばしば「女性販売員」の仕事、もしくはより正確には、無用なもしくは瀟洒なものの女性販売員の仕事とし

てほとんど常に同定されていた——それはあたかもプレーヤーたちが自らの探索を導くために、「女店員」の社会的表象を使用しているかのよう——ということである。

解釈の極めて一般的なこうした傾向がとりわけ顕著であるのは、プレーヤーたちが女性である場合であり、またそれが特定の年齢層の女性であり、(その職業実践が、「深刻なこと」——「軽薄なこと」ではなく——をもっぱらとし、その社会的定義において倫理のおよび社会的コントロール、倫理の仕事を含む価値体系への同意を要請する) 職業に帰属しているような女性の場合にはいっそう顕著である。すなわちこうした解釈傾向は、社会福祉士長において、また女性引退教師においてもっとも頻繁に現れている。こうした傾向は、管理の職業を実行し、年齢のいった女性たちが登場する別のセッションでも見られるのであるが。

我々は、特に意味深い二つの事例を手短かに提示することにしよう。そこでは、隠された人物は「カバー・ガール」もしくは「ファッションモデル」の職業を行う人として同定され、二つとも、——プレーヤーたちがその行動について行う口頭での説明の中で——身体的特徴、「若い女性」、「軽薄さ」、性を強調されすぎた、「大胆な」、彼女が自らの「身体」にもたらす関心に集中した、また「誘惑」の企図に取り組む女性という特徴を含んでいる。

上述の二つの事例において、形態がこの点で際立っており、年齢に関する質問(1フランしかかからないのに)は提起されなかったが、しかしながらこの質問は、描かれる肖像の根拠を確認するためにはぜったいに必要であったはずである。したがって、ゲームの進行係がいったんゲームが終わったときに、隠された人物が、50歳の商人であることを教えたときに、プレーヤーたちからの驚きの声が発せられたのである。このことは、明らかに、彼女らが構成した形態を打ち壊し、もしくは、より正確に言えば、こうした形態が彼女たちを包圍し、彼女たちを言わば支配していたのである。

ミレーユは公務員の娘で、63歳の元小学校教師である。彼女は42フランを支出し7つの質問を提示した。すなわち、読んでいる雑誌、3人の親友の職業、最後の夏のヴァカンス、最近読んだ本、隠された人物はその住宅の所有者か間借り人か、この人は英語を流暢に話すか、その人の車のブランドとモデルである。彼女が示した職業は「ファッションモデル、カバー・ガール」であった。いったんゲームが終了するや、彼女がたどった行動についての説明は以下の通りである。

「私はもっと少なく支出できたかもしれないし、三つの質問しかしないこともできたかもしれない。つまり、あなたはどんな雑誌を読んでいますか。Jours de Franceですって、私はこの人は女性だと思った。あなたの三人の親友は誰ですか。その答えはアクセサリー店販売員、会社を経営していた看護婦、アクセサリー店代表であった。第三の質問は、パリでのあなたの家で、また日中は(ついでながらプール付きの)ホテルで。これらの三つの質問で、この娘のイメージを作り上げた。私は彼女が若い、極めて平均的なレベル(おそらく知的にはきわめて凡庸と彼女は言いたかった)で、奢侈な商業に精通しており、美容のために、彼女にサービスしてくれる看護婦を持ち、美容師つきで、自らの身体を晒すのに物怖じしない。私は彼女が、あたりを眺めたり、気晴らしをしたりするためだけにプール付きのホテルに行くことができるなどとは全く考えていなかった。私は彼女が、どっちにしても泳ぐためにそこに行ったと考えた(パトロンを見つけに、「男あさりするために?」)。そう、男あさりをするために。ほら、こんな風に私は、この娘のイメージを作り上げたの。私は、こんな風にうまくやったし、なぜこれ以上続けなければならないの、と自分に言ったの。どちらにしても、私はためらっていた。私は、彼女がどんな本を読んでいるか質問したわ。「クレーマー・クレーマー Kramer contre Kramer」だった。このことはまたもや

一致した。全くびつたし。彼女は賃貸暮らしで、かろうじて英語を話し、Alfa Romeoの自動車を持ち、このこともまったく順調に行ったわ。私は、彼女がカバー・ガールであると自分に言い聞かせた。とても活発でスタイルのいい娘。大胆さに満ちた20歳の娘。私は彼女をこんな風に見たわ」。

ミレーユと同様、ジョゼット(55歳女性)もまた、提示された隠された人物の中に、商業関係者でなく、「ファッションモデル」を認めた。若い娘時代にHECの資格を取得し、公務員の娘(ミレーユと同じく)で、彼女は長い間にわたり、アルバイト派遣業会社を経営していた。彼女は今失業中である。ジョゼットは31フランを支出し、5つの質問を提示した。すなわちストライキについての世論についての質問(「公務員の中でストが多すぎやしませんか?」)、この前の夏のヴァカンス、自動車のブランドとモデル、親友3人の職業(4つの質問、すなわち雑誌と友人、ヴァカンス、自動車は、ミレーユとジョゼットのゲームに共通している)。いったんゲームが終了したときに、彼女がその行動について与えたコメントは以下のものである。すなわち

「私はストの質問をとったわ。私は先入観を持ってスタートした。私は、上級管理職の事例について書かれていたのだから、別の極端に移行することになろうと自問した(つまり労働者の場合について提示すること)。私が、彼女がストに反対しているとわかったとき、私は文化的なレベル、読んでいる雑誌へと移行した。そこではこれは私を当惑させた。私は即座に、この人は低い知的レベルの女性だと考えた。私は、Jours de Franceのような雑誌に関心を持つ頭の程度の男性(たとえ教養のない労働者であるとしても)を誰も知らないわ。この雑誌しか読まないなんて、本当にありなの?次いで私は、ヴァカンスの質問を提起した。これが私に教えてくれるだろうと思って。そしてそこでこそまたもや私は混乱の淵に投げ込まれた。ヴァカンスを昼間、プール付きのホテルに行くためだ

んで。どっちにしたって、別のプールだってあるでしょうに。ほんとに、こうした循環の中で動き回っているに違いないんだわ。お金のない人で、特定の環境の中で動き回ろうとする人だわ。いったい誰をイメージしようとしているんでしょう。私は彼女を、こんな風に見ていた。次いで、ある回答で私は、この意見を確信したわ。それは、彼女がAlfa Romeo Sprint 1979を持っていることでした。これは、妾だなど自分に言いました。結局、Alfa Romeoは、誰でもがまじまじと見る車種です。この贅沢を受け入れる資金を持つことなしに、贅沢な環境で動き回っている誰かの車だわ。ヴァカンスを過ごすこと。今どき、お金を持っているならば、ギリシャで過ごすんじゃないかしら。よく知らないけど。そのとらえどころのないパーソナリティを描こうとするために、私はいくつか質問したわ。私は友人について質問したの。そのときそこでは彼女は私の評価の中でちょっと上昇した。なぜって、どっちにしろ、彼女は働いている人たちとしばしば会っているから。私が考えていたこととは違っていたわ。友人たちの中では、商業関係、こう言ってよければ商人には私は注目しなかった。私はアクセサリーの贅沢な側面を見た。そしてそこから、こんな風に直感を導いて、彼女はファッションモデルに違いないってね。動き回っている人だから。きちんとしただけじゃなく贅沢な外見を持つ必要がある人、しかも必ずしも贅沢に暮らすお金がなくとも。私は彼女がかなり若いと見たわ。おそらく30歳ね。」

ここに見られるのは、同定化労働¹⁷⁾を導く過程が働いていることである。その形態がいったん固定されると(「女店員」、「掃除婦」、「ファッションモデル」など)、情報は、しばしば極めて自由な変容もしくは「翻訳」を代償として、この形態に応じて再解釈される(かくして、最初の例では看護婦の友人がエステティシャンとなり、第二の例では友人たちの職業は「商業」、「ブティック」ではなく、「贅沢」を喚起するよう

に)。同様に、第一の例では、いったん際立って確立されるや、情報は輪郭を修正するためではなく、プレーヤーが描いたポートレートの正確さへの自らの信念を保証するために使用されるのである。つまりミレーユは、「それは良かったわ」とか「それはとてもうまく行った」といった唯一のコメントで、特徴を数え上げる。しかも、これらの新しい情報の間の関係と、彼女が以前の情報により構築した社会的形態を明示化する必要性を感じることなく、である。これらの情報が、いかなる点で、どの様な関係で、彼女が抱いた表象を裏書きしてくれるかを、彼女は言うことができない。彼女にとって、それは自明のことだからである。

1. 解釈の傾向

ゲームにより要求されるコンピテンスが知識に関するものだけだとしたら(つまり、社会的世界の内在的知識や以前の社会的経験の知識であれ、学術的な知識であれ)、年齢や環境への帰属(隠された人物もまたこれに帰属している)、教育水準がゲームの質にプラスの影響を与えるに違いない。ところが国立の大企業のマーケティング部局の管理職層は、——彼らはたいがいグランゼコールの学歴資格を持ち、彼らに提示される隠された人物(工業の上級管理職層)が帰属しているような社会環境の一部をなしているにもかかわらず——良好なスコアを上げるのに成功しなかった。同様に引退女性教師集団(その教育水準は高く、均質的である)において、プレーヤーたちは、この個人の隠された職業的アイデンティティを発見するために多くの費用を支出している。

支出額総計と質問数、回答の正確さとの間の関係の最初の分析が示すのは、うまくプレーする性向はたんにより一般的な知識だけにではなく、解釈(おそらく社会的アイデンティティの特別な記号を動員し使用するエージェントの能力を、少なくとも部分的には決定している)に依存していることである。

まずいプレーの仕方も複数ある（後の別の論考において分析されることになろう）。ゲームが要請している解釈的作業を拒否する最もしばしば見られたやり方の一つは、少数の高価な質問（国家の変数）をするように促す。これがとりわけしばしば見られるのは、職業生活において、たとえつましいものであれ責任や権威の強い地位を有するプレーヤーたちにおいてであり、またそれによって、（ゲームにおいて動員したハンディを考慮すれば）しばしば最も高価な公式的質問を使用する傾向にあるプレーヤーたちである。自らの労働関係、とりわけ部下との関係を（彼らを雇用し、管理規則に記載されることで法規上の性格を有する事業所により許容された）格付けへと準拠させることが、こうした人々の官僚的な職業的役割なのである。こうして彼らは公務員に対して高い規定権力を付与すると同時に、ゲームにおいても生活においても、最も良いプレーヤーたちが使用する特別な指標を考慮しないように促すのである。

「引退女性教師を集めたセッションに参加したジュヌヴィエーヴは66歳で、英語教授資格を有し、商業部長の娘である。彼女は4つの質問を提起することで100フラン支出し、職業として「農業者」を指摘した。パーソナルな指標を活用しようとする代わりに、結局、彼女は、それぞれ40フランかかる二つの質問を提起することから始め、そこから彼女は職業に関する直接的情報を得られると期待した。すなわち取得した学歴資格（答えは、学歴資格なし）と、隠された人物がその労働において部下を持っているか（答えは「部下なし」である）。次いで彼女は読んでいた雑誌について質問した（日刊紙はなし、週刊誌一冊 *Jours de France*、月刊誌なし）。そして彼女は、この人物が、その職業生活を通じて、失業期間を経験しているかどうか尋ねた（明らかに彼女は、労働者だと考えた）。隠された人物は失業期間がなかったことから、ジュヌヴィエーヴは、自分が形成していたイメージを若干修正し、自分の持ち金も使い果たしたの

で、農民のイメージに集中した。農民は従業員でも、労働者でもなく、所有権を有している。これは、ブルジョワやプチブルジョワの特徴を除かれ、少なくとも否定的に定義されるとき、民衆階級を特徴付けている。」

「二つ目の例。ジョゼフィーヌは41歳でエンジニアの娘、政治学院出身で、行政官僚と結婚している。彼女は最初の隠された人物の中に一人の「代表取締役社長」（「上級管理職」ではなく）を認めた。第二の人物の中には、「アクセサリー店代表」（「アクセサリー販売業」ではなく）を認めた。これらの間違いは、全体から切断された特定の指標、いくつかのエンブレムにより極めて図式的に特徴付けられた社会的タイプと関連した特定の指標への焦点化を原則としている（最初の事例で、隠された人物が「代表取締役社長」であるのは、この人物の読む雑誌が *Time* 誌であることにより、その趣味の一つがヨットセーリングであるからである。第二の例ではこの人物が「女性代表」であるのは、彼女が「強力な」自動車 *Alfa Romeo* を所有しており、3人の親友の一人が、彼自身、「代表」だからである）。

参加者たちの回答に頻繁に存在するこれらの誤謬は、その可能な複数の側面の領域に登場するたった一つのアイデンティティ（「展示販売員」としてその職業生活を開始した「アクセサリー販売員」は、おそらく、「女性代表者」となる客観的な機会を有していた）を、あるいは自らの社会的軌跡に挿入された職業的アイデンティティを、隠された人物に付与することを特徴としている。我々はこのことを、「科学研究者」としてか、「代表取締役社長」としてしばしば同一視される「上級管理職層」の中によく見ることができる。ところがこの化学エンジニアは、エコール・サントラルの卒業生で、アメリカのPhD保有者で、実際にはそのキャリアを国立科学センター CNRSで始めている。現在、大企業の研究施設の部長であり、彼はますます管理業務、販売活動に方向を切っており、そのキャリアの終わりには、彼が属しているグルー

プ企業を運営したいと望んでいるのであった。

「第三回目のゲーム（その隠された人物は56歳の専門的労働者であった）で、ジョゼフィーヌは「正答」から大きく外れてしまった。というのも彼女は「精神障害者のための女性医療アシスタント」を認めたと考えたからである（彼女は48フラン支出した）。彼女はまず、読んでいる雑誌に関する質問を提起し、女性だと判断した。というのも、この未知の人は日刊紙を読まず、『カトリック生活』、『今日の女性』、『一週間のテレビ番組』、『歴史Historia』（こうした雑誌は、実際は、彼の妻が買っていた）と応えていたからである。確信がかくも強かったためにジョゼフィーヌは性に関する質問（それは1フランしかかからなかったのに）は提起しなかった。次いで彼女は、隠された人物がアソシアシオンに加盟しているかどうかを質問した（この質問は25フランで他ではほとんど提起されていなかったのに）。彼女に与えられた回答は「住宅委員会、障害者支援協会」であった。「それならば、とジョゼフィーヌは言う、私はすぐに医療関連領域に行き着いたわ」。女性で、「社会福祉」ないし「医療的」職業を实践する女性だと確信して、彼女はもはや、この最初の印象を修正するために彼女が獲得している別の情報を使用することができなかった。彼女は趣味について質問している。「日曜大工」であった。「私は、完全に、途方に暮れたわ」。次いで3人の親友についての質問（「精密機械工、仕立屋、男性店員」）。「このことがますます私を迷わせたわ。最終的に私は、この人は障害者の再教育の女性サービス補助員、精神障害者のための女性医療補助員だと結論づけたの」。

ここでは誤謬は、ジョゼフィーヌの注目が集中した特定の指標の過剰解釈に基づいており、こうした指標は、まさに（隠された人物が「労働者」の典型的な表象からそれによって遠ざかってしまうような）特徴に対応している。すなわち旧農業者で、熱心なカトリック教徒で、自分

のそれよりも高い文化的実践水準の女性従業員と結婚している（こうして年間に読む本の冊数の質問について彼は、「一冊も読まないよ、でも妻は読むよ」と応えている）。この専門的労働者はその社会的実践において「女性的」特徴を有しており、そのアソシアシオンの、文化的実践の指標——肉体的力や組合や政治の過激主義、チームのスポーツといった、「男らしい」（そして、あるいは「粗暴な」）特徴システムによって定義される「労働者」の社会的タイプには対応していない——を有している。

最も良い成績は、——そのメンバーが、不安定な職業生活を通じて、自己防衛的に、解釈のこうした皮肉な使用（ゲームが要請している）を行わなければならないような——集団により獲得されている。国家の変数、強者の変数が処方として役立つ一方で、単純化された指標に支援された解釈は、公式的制約システムから自らを解放するための武器として使用され得る。なんとなればこうした解釈は、隠された意図を曝露することで、つまり、それにより関係を掌握しようとするができるようなモデルを構築することで、ボスの裁量的行為に意味を与えることを可能とさせるからである。曝露のこうした個人的な企図は、社会的世界に関する決定論的、還元主義的なまなごしの採用と関連している。世界についてのこうした見方——ささやかな原因によって大きな結果を説明しようとし、隠されたものによって疑う余地のないことを、秘密の同盟の凝集性によって行為の整合性を説明しようとする——は、透明で安定した原則により整序化された世界についての公式的表象とも対立し、自由な個人から構成された規則性のない社会的世界、支配的集団の内部で責任のない地位（ブルジョワジーの職業なしの若者や女性など）の占有としばしば結合した人々の自由意志に基づいた社会的世界、これらの世界についての原子化されたイメージとも対立する。世界についてのこうした見方は、社会的世界の特別な経験（支配された親密さの経験、その権力及びコントロールに服している人々の世

界へと自ら参加することの経験)と結合している。しばしば女性(妻, 秘書など)のそれである。こうした経験は常に女性的なことを保持している。たとえそれが男性によって体験されているときでさえ(こうして我々は, 失業と零落の結果を被ったにしろ労働者集団においてはこのような性向は観察されないのである)。

この種の経験は, 女性調査員, 学歴資格のない者, 植字工, などが体験する経験である。彼らはしばしば副業を行い, 職業訓練を受けている失業者(しばしば独学者の中間管理職)であり, すべてが, 即座の雇用提供と乱暴な失職との継起により特徴付けられる変化に富んだ職業的軌跡を持ってきたことを共通点としている。結局, 別のそれぞれの集団の中で, 良い成績を獲得した諸個人は, より大きな社会的脆弱さ——差別に関連していようと, 職業キャリアの挫折にであろうと, (販売員の集団の参加者の一人のことを思い浮かべるのだが) 職業の価値に合致した自我の男らしいイメージを身につけることへの個人的な困難に関連していようと——によって, 他の参加者から最もしばしば区別される。すべての場合において, 最も優れたプレーヤーは, おそらく, 自らを「ちっぽけな人」にしてしまう策略への性向(力強さとは逆に)を発展させてきたことを, 相対的なその脆弱さに負っているのである。

2. 国家の分類

職業名称システム及び仕事の呼称システムの均質化, より一般的には社会的分類の均質化, とりわけ職業集団の表象=代表の公式的空間の形成(それが, 委員会といったように現実的であろうと, 分類といったように象徴的であろうと)は, 国家形成の相関的な一連の統一化過程(言語的, 社会的, 法律的, など)に帰属する。「だれもが, 法律を無視するとは考えられていない」と同様に, 今日, フランスでは, 各人はそれを使用することができるように(それを再現するためにであろうと, 分類課業において

これを作動させるためにであろうと, その当たり前の根拠を別の人と議論するためにであろうと, あるいは場合によっては, そこに自らを位置づけるためにであろうと)職業的表象=代表の公式的システムに十分に慣れ親しんでいる。そしてこれは, それ自体を顕著なものとしているのであるが, このシステムもまたそれがそこにおいて表明されているような分類も, これまで学校による明示的な移転の対象となっては来なかったのである。社会集団の最も個人化されたイメージと, 社会構造に関する最も一般的な表象との間での, こうした相対的な合致は, 広く普及したたたき込み過程の成果である。こうした過程は, およそ30年代以降, フランスにおいて, (実際のところ, 公式的ではなくとも)コーポラティズム論的表象=代表の要請に配慮した政治的管理様式の漸次的形成に軌を一にしてきた。こうした管理様式は大戦以降, 端的に言って, 新しい諸制度(そこでは, 例えば同数委員会や(モネプランなど)計画のミッションにおけるように, 高級官僚や専門家, 企業者側代表, 組合側代表, アソシエーション運動に由来する代表などが連結されていた)の確立により特徴付けられている。こうした新しい政治的表象——その起源はおそらく, 労働運動の社会主義的伝統と同時に, 社会カトリシズム, (両大戦間期末の中産階級の組織から鼓舞された)コーポラティズムの伝統の中に見いだされるであろう——は, Claude Nicoleが言うように, 「共和制的理性」の資格なき市民に対して資格ある人々を代えた。こうした資格ある人々は, この者が行う職業によってのみならず, 格付けレベルにおけるその地位によって, さらにますます, この者が学歴資格の配置において占めている場所により定義されるのである。

しかしながら, (「官僚制」言説が国家分類にしばしば付与しているような)全能など有さない国家分類の賦課の力を過大評価しないように用心しなければならない。「官僚制」言説は完全な受動性もしくは純粋な反逆以外の別の選択肢を構想し得ないからである。諸個人は, 公式

的分類を熟知し、これを活用するが、しかしそれは、常に、これを登場させ利用し、手玉にとるためにでもある。後に別稿で、誤謬の文法を分析することで我々がそれを示すことになるが、例えば分類の見かけ上の誤謬は決して、分類についての悪い知識の指標だけなのではない。それはつねにまた、諸個人が、社会集団の政治的表象と取り結ぶ関係の表明でもある。こうして、諸個人が一般的分類システムについて行う再現もまた、その特異性そのものにおいて、個人の特異なる地位と、一般的道具に対するその立ち位置を示しているのである。

結局、国家分類が社会的同定の道具であるなどとは何も言っていない。こうして例えば、一般的分類を再現する能力は、隠された人物の職業を言い当てる性向から独立しているように思われる。こうした性向は公式的カードの知識に直接結びついていないだけでなく、上述のように公式的表象とは逆に訓練形成された解釈性向を実現するのである。

しかし、研究の現段階では、解釈的性向が必然的に、直接に社会的な形態を生み出すものであるなどとは言えないし、もしくは解釈的性向が、社会学的能力の実践的等価物と直接的に結合しているなどとも言えない。解釈の節約が、(おそらく感情を伴った)全般的形態の一覧表によって作業する性向に依存していること——確かな基準システムを結合することによってではなく、あるいは少なくともそれだけによってではなく——が正しいとしても、実験の調書がしばしば語るように(「私は彼がわかった」、「私は彼を感じた」、「私は彼のことをよくわかるわ」など)、検討されている隠された人物が——同定されることなく、もしくは少なくともこうした同定が、社会的なタームで直接語られることなく——認められ得るのである。ゲームの制約こそが、参加者に対して、自らが、構築した形態を社会空間に投影させるように促す(このことはしばしば、狭義での解釈に引き継ぐ特別な作業を要請するように思われる)が、しかし、彼らが別のタイプの制約を含む別のゲームであ

れば、うまく、もしくはしばしばよりよく、例えば、心理学的タームで定義されたパーソナリティのそのような別の投影空間を使用することができようなどと言うことにはならない。

社会的世界の公式的カードへと彼ら自身の解釈を投影する、参加者にしばしば確認される性向(彼らが隠された人物に対して、分類上の地位を割り振るとき、彼らが行うことなのだが、また、彼らが、これに、職業名を付与するときに彼らが行うことなのだが)、さらに社会的タームで、またしばしば準社会学的タームで、こうした割当付与を正当化する言説(ある点では、心理学分析の意味での「副次的精緻化」に比肩しうる)を産出する性向、こうした性向が示しているのは、国家の分類が、今日、際だった焦点の役割を演じていることである。

原注

- 1) このテキストはSociologie誌の編集委員会(Baptiste CoulmontとPierre Merckléにより監修されている)全員による再読から恩恵を受けている。これはまたCédric Hugréeの注意深い再読からも恩恵を受けている。
- 2) 例えば、フランスにおける「管理職層」のカテゴリーの形成の事例において、定義と限定付けの象徴的労働が演じた役割(それには、とりわけ1950-60年代以降、大学の社会学がきわめて重要な貢献を行った)を参照せよ(Boltanski, 1979)。
- 3) このテーマに関する研究全体は、統計的職業的、社会職業的分類の改革の枠組みにおいて、INSEEで行われた。その職業について調査された人々の申告について、またコード化については「社会職業カテゴリーと調査におけるその総覧」, Archives et documents, 38 INSEE とりわけ Laurent Thévenot “Un emploi à quell titre: l'identité professionnelle dans les enquêtes”を参照のこと。医療関係職業の表象と、その統計的登録との関係について、これらの調査は継続中である。
- 4) 構成された教育的素材はその後、INSEEにより刊行されることになる。
- 5) この実験が典型的形態を産出させることを目的としている限りで、我々は、社会的カテゴリーとその表象についての説明作業を実施することが何よりもまず好ましいと判断した。
- 6) 実施された手続きは、科学人類学領域における人類学者により使用された技術から着想を得ている

- (例えば Tyler, 1969 を参照)。
- 7) 社会的世界の表象システムにおける実践的論理の機能については, Bourdieu, 1980b を参照。
 - 8) 分析は, 二人のチームごとに作業する, 9 グループ, 120 人に関わる。
 - 9) 図式的 (もしくは製図的) 客観化の効果については J. Goody, 1978 を参照。
 - 10) 例えば, W.H. Goodenough, 1956, および A. Kimball Romney, Goodwin D'Andrade, 1964 を参照。成分分析主義的潮流への批判が E. Rosch の分析の出発点をなしていた。すなわち「民衆の分類研究における人類学における現在の潮流, また例えば成分分析における現在の潮流は, —それによって特定領域におけるタームの民衆的使用が形式的に秩序づけられるような—最小限の基礎的特徴を露見しようとする」。このことは, 「タームの間での境界線にしき配慮せず, カテゴリー間での境界線があたかも常に定義されているかのよう」にさせる」(Rosch, 1973)。
 - 11) 様々な社会的カテゴリー (とりわけ「管理職層」) のメンバーの「良い事例」を与えるという課業はこれまで, 135 人 (12-15 人のグループにまとめられた) により実施されてきた。このことは 400 人の「管理職層」の標本を与えた。素材の収集はまだ終わっていないので, 我々は, ここでは 4 つのグループにより提供された回答のみを比較するであろう。すなわち, 国有大企業に属する高い学歴資格の管理職層グループと, 職業訓練中の失業者のグループ, 商業のグループ (多国籍企業に属する, たいいては学歴資格のない), 最後に引退者の教職員グループ (小学校教師および中等教育教師) である。
 - 12) より確立した統計分類においてさえ, また自然 (Tolosan の活動カテゴリー, すなわち動物および植物, 鉱物) の, もしくは測定可能なもの (年数で測定される教育の「水準」) の中立性を付与する統計分類においてさえ, 分類主義者の同様の表明を明らかにすることができる。彼は自らを取り囲んでいる地位の表象 (高級官僚) を増殖させ, 民間の管理職層の表象を弱める (Desrosières, Thevenot, 1979)。
 - 13) ハビトゥス概念については, Bourdieu, 1979 参照。
 - 14) それほど, 陰謀的でない半オープンな質問もまた閉じた質問が可能とさせないような解釈を生み出す。こうして, 三人の親友の職業についての質問に, 「トップ女性販売員」という回答を得たクロードは, 以下のようなコメントをつけた。「昇進した誰かに違いない, さもなければ彼女は単に販売員としたであろう」。こうして彼はそれまですべてを逃れていた情報を構築し, 最初にこれをやり終えた。彼は, 回答を「解釈する」。彼は, 客観的な意図

性を付与し, それにより言葉に意味を与える。そこにある「必要のなかったであろう」言葉の存在に意味を与えるのである。それにより彼は, 過剰解釈の告発にさえさらされる。すなわち「こうした言葉は, ここでは偶然だよ」, 「その存在は特別な意味はないんだよ」などと。

- 15) 以下を参照。Smedslund (1955) および Bruner, Goodnow, Austin, Brown (1962) とりわけ第 7 章の On categorizing with probabilistic cues。
- 16) Messac, 1929 の中に, 新しい文学ジャンルである「探偵小説」において 19 世紀後半以降, 使用されてきた推論方法の歴史的 analysis を見出すことができる。
- 17) 参加者たちが完成すべき同一化の労働は, ある点で, 他者の通常の知覚 (Heidegger, 1958) に近く, 別の点で, 「付与割当」(Jones, et al., 1971) に近い。こうした二つの次元は W. Doise が示していたように, カテゴリー化過程に強く結合している (Doise, 1975, pp. 134-139)。

参考文献

- Berlin B. & Kay P. (1969), Basic Color Terms: Their Universality and Evolution, Berkeley, University of California Press.
- Boltanski L. (1979), «Taxinomies sociales et luttes de classes. La mobilisation de la "classe moyenne" et l'invention des "cadres"», Actes de la recherche en sciences sociales, n° 29, septembre, pp. 75-106, http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/arss_0335-5322_1979_num_29_1_2650.
- Bourdieu P. (1979), La Distinction. Critique sociale du jugement, Paris, Éditions de Minuit.
- Bourdieu P. (1980a), «L'identité et la représentation. Éléments pour une réflexion critique sur l'idée de région», Actes de la recherche en sciences sociales, 35, novembre, pp. 63-72, http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/arss_0335-5322_1980_num_35_1_2100.
- Bourdieu P. (1980b), Le Sens pratique, Paris, Éditions de Minuit.
- Bruner J.S., Goodnow J.J., Austin G.A. & Brown R.W. (1962), A study of thinking, New York, Science Éditions.
- Bruner J.S. & Olver R.R., Greenfield P.M. (1966), Studies in cognitive growth, New York, Wiley.
- Centlivre P. (1979), «Groupes ethniques: de l'hétérogénéité d'un concept aux ambiguïtés de la représentation. L'exemple afghan», in E. Ehlers (ed.), Beiträge zur Kulturgeographie des islamischen Orients, Marburg, Lahn, pp. 25-37.

Mar. 2016

社会的世界においていかに自らを方向付けるか

- Desrosières A., Thevenot L. (1979), «Les mots et les chiffres: les nomenclatures socioprofessionnelles», *Économie et statistique*, vol. 110, n° 110, pp. 49-65. http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/estat_0336-1454_1979_num_110_1_4260.
- Doise W. (1976), *L'Articulation psychosociologique et les relations entre groupes*, Bruxelles, A. de Boeck.
- Goodenough W. H. (1956), «Componential analysis and the study of meaning», *Language*, 32, pp. 195-216.
- Goody J. (1978); *La Raison graphique*, Paris, Éditions de Minuit.
- Heider F. (1958), *The Psychology of Interpersonal Relations*, New York, John Wiley.
- Jones E. E., & al. (1971), *Attribution: Perceiving the Causes of Behavior*, Morristown, N.J., General Learning Press.
- Kay P. & McDaniell C. (1978), «The linguistic significance of the meanings of basic color terms», *Language*, 54 (3), sept., pp. 610-643.
- Kimball Romney A. & Goodwin D'Andrade R. (1964), «Cognitive aspects of English kin terms», *American Anthropologist*, vol. 66, 1964, pp. 146-170.
- Lenski G. E. (1954), «StatusCrystallisation: a non vertical dimension of social status», *American Sociological Review*, 19, pp. 405-413.
- Maire E. (1980), *Reconstruire l'espoir*, Paris, Éd. Du Seuil.
- Messac R. (1929), *Le Detective novel et l'influence de la pensée scientifique*, Paris, Librairie ancienne Honoré Champion.
- Moscovici S. (1961), *La Psychanalyse, son image et public*, Paris, Puf.
- Rosch E. (1973), «On the internal structure of perceptual and semantic categories», in T.E. Moore (ed.), *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, New York, Academic Press, pp. 111-144.
- Rosch E. (1977), «Classification of real-world objects: origins and representations in cognition», in P.N. Johnson-Laird & P.C. Wason (eds.), *Thinking, Readings in Cognitive Science*, Cambridge University Press, pp. 212-222.
- Rosch E. & Lloyd B.B. (1978), *Cognition and Categorization*, New York, Erlbaum.
- Smedslund J. (1955), *Multiple-probability Learning*, Oslo, AkademiskForlag.
- Tyler S. (ed.) (1969), *Cognitive Anthropology*, New York, Holt Rinhart and Winston.

(2015年11月20日掲載決定)